

355
85

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始





355-85

世界動物園



學習院
助教
太田順治 著

大正
7. 6. 26
内交

自序

子供は天性自然物を好むが、わけても動物に就いて深い趣味を持つて居る。彼の動物園は常に多くの子供を吸収し、蟬をとり蜻蛉を釣る子供は、真夏の暑さも平氣である。惟ふに子供の此の天性は十分尊重すべきもので、之を善導すれば、動物に對する愛好心を育成し、かたはら緻密な觀察力や、正當な理解力を養成することが出来るであらう。而もこれが所謂科學的思想養成の大切な第一歩であるといはねばならぬ。

翻つて近頃盛に出版される少年讀物を見ると、自然物に關するものは極めて少いやうである。自然物に對する子供の天性を、獨り讀物のみによつて善導することは困難であらうが、併し其の心性を益々開發誘導する點に至つては、讀物の力も亦預りて大なりといふ事を憚らない。余が本書に筆を執つたのも、此の力を認められたからである。たゞ淺學不才、加ふるに推敵に十分の



目次

世界動物園目次

一 動物を可愛がつて下さる 三

二 人と猿 四

三 猿の優等生 六

四 猛獸物語 一〇

五 熊と熊狩 二〇

六 山犬と狼 二五

七 嫌がられる狐狸は有用動物 三〇

八 マングースの蛇退治 三五

九 私は海豹島の臙肭獸 三七

一〇 捕鯨船便乗記 四〇



自序

時日が得られなかつた爲、却つて誤りを傳へはせぬかと恐れて居る。
 最後に本書の編纂に當つて、諸先輩の苦心になつた研究から、少からぬ材
 料を得たことに對し、こゝに特筆して厚く感謝の意を表す。

大正七年六月

著者しるす



一一	牛と馬との自慢話	四
一二	沙漠の船	五
一三	荒い野猪と暢氣な豚	五
一四	毛織物の母	六
一五	奈良の鹿	六
一六	馬鹿の議論	六
一七	樺太の馴鹿	七
一八	麝香の持主	七
一九	麒麟と河馬	七
二〇	角比へ	七
二一	象	七
二二	兎狩	八



二三	鼠の跋扈	七
二四	建築家の海狸	九
二五	飛行家の蝙蝠	九
二六	地をもぐる罽鼠	一〇
二七	鱗を被つてゐる獣	一〇
二八	カンガルー	一〇
二九	卵を産む獣	一一
三〇	巧妙な飛行機	一一
三一	鳥類の王	一一
三二	鷹狩	一二
三三	木を叩く啄木鳥	一二
三四	巢を盗む杜鵑と郭公	一二





目

次

三五	愛すべき燕	一三五
三六	食用になる燕の巢	一三一
三七	鳥の手柄	一三九
三八	小鳥の音楽家と舞蹈家	一四三
三九	鳩の一族	一四六
四〇	長尾鶏	一五二
四一	お歳暮の雉子と鴨	一五四
四二	雁の旅	一六〇
四三	鶺鴒	一六三
四四	ペリカン	一六四
四五	信天翁とペンギン	一六五
四六	鶴	一六九

四



目

次

四七	最も大きい鳥と最も小さい鳥	一七三
四八	鳥の祖先	一七六
四九	石龜と「すつぼん」	一七八
五〇	海龜	一八三
五一	籠甲	一八四
五二	切れ易い私の尾	一八六
五三	飛龍とカメレオン	一八九
五四	鰐魚	一九一
五五	蛇の三不思議	一九六
五六	大蛇	一九九
五七	毒蛇	二〇一
五八	「とのさまがへる」の生活	二〇三

五





目

次

七一	子守する魚と巣を作る魚	二四四
七二	「ひらめ」と鰻の一生	二四五
七三	金魚と眼高	二五六
七四	胎生する魚	二四三
七五	恐ろしい鮫類	二四四
七六	肺をもつ魚	二四九
七七	「やつめうなぎ」とめくらうなぎ	二五三
七八	頭をもたぬ「なめくぢ魚」	二五六
七九	むずわりの「ほや」	二五七
八〇	脊椎動物	二五九
八一	脊椎動物と互の連絡	二六一
八二	ダーウイン	二六四

七



目

次

五九	「ひきがへる」の皮	二〇八
六〇	面白い蛙	二〇九
六一	私が見た蝌蚪の越年	二一一
六二	世界に名高い山椒魚	二二二
六三	魚の運動	二二五
六四	魚類の王	二二九
六五	勇壯な鯉釣り	二三〇
六六	木上り魚と飛行魚	二三三
六七	發電魚と發光魚	二三六
六八	河豚の毒	二三八
六九	河豚提灯と箱河豚	二三九
七〇	「あんこう」と「こばんいたさ」	二三九

六





象 度 印



目次

世界動物園目次終

八





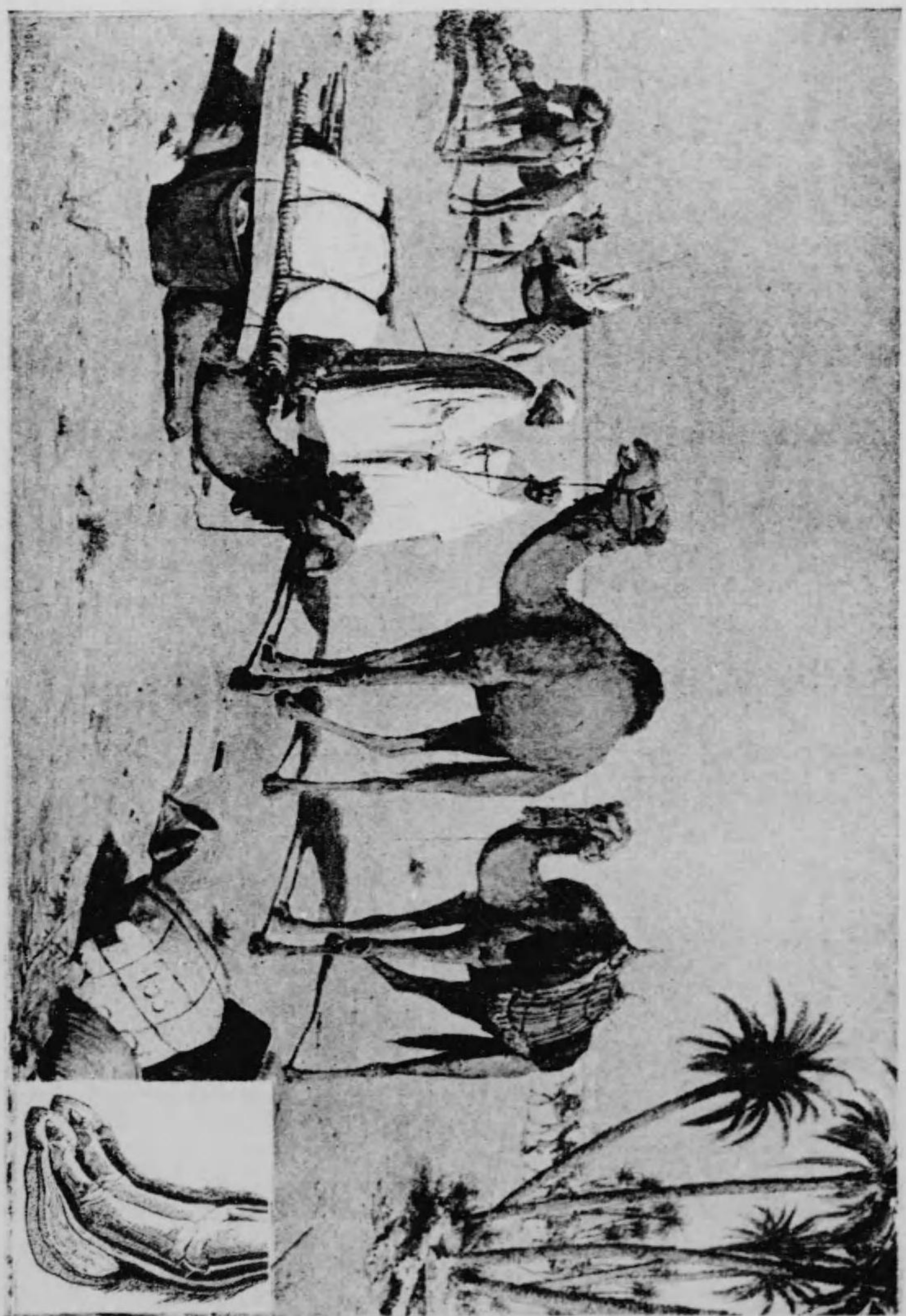
象 野 印



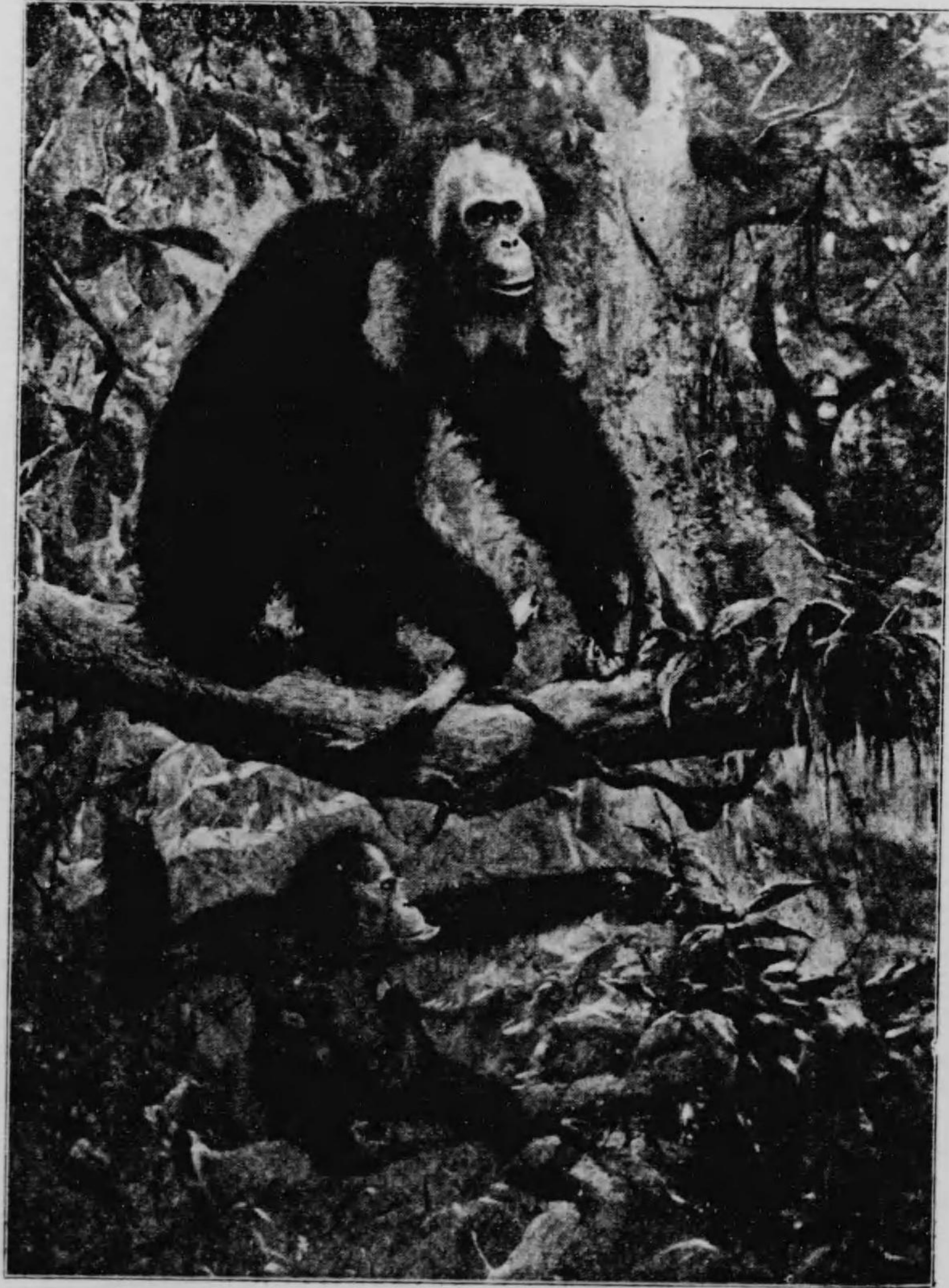
目次

世界動物園目次終





駝駱を渡る沙漠



族家一の々猩



子
獅



虎

1911
MAY 15
1911



[Blank page]

一 動物を可愛がつて下さい

私の知つてゐる人に犬をなつけることの犬を上手な人があります。どんなに意地の悪さうな犬でも、この人に向へばすぐなつけられてしまひます。わきで見ると何か魔術でも使つてゐるのではなからうかと思はれる位ですが、色々聞いて見ると此の人は犬が非常に好きで、どんな犬を見ても嫌だとか憎いとか思つたことがないさうです。若し近よつて来れば撫てやらうと待ちかまへてゐるとのことですから、犬が見てもこの人の顔つき其の他の様子に何ともいへぬやさしい所があつて、知らずになつけられてしまふのでせう。けれどもこんな人は我が國では珍らしい方で、一般からいふと日本人は兎角動物を嫌つたりいぢめたりすることが多くて、之を可愛がるのが少いやうであります。散歩でもしてゐる途中に犬が目につくと、はや石を拾つた



り杖を握り直したりする人が少くありません。

動物を可愛がる人はどうしても動物に近づくことが多くなります。近づくことが多くなれば、其の動物の身体や性質がだん／＼と分つて来ます。殊に可愛といふ心を以て見ると、普通の人ではとても氣のつかぬやうな、細い而も非常に大切な點に氣がつくやうになります。なほ動物の方からいつても、心から自分を可愛がつてくれる人には安心して居る事が出来ますから、従つて其の性質もだだやかになつて来るのであります。

西洋では馬や牛等の家畜がだん／＼と改良されてよい種類が澤山出来てゐますが、我が國では家畜の改良は中々うまく行きません。のみならずよい馬や牛が輸入されても、日本人の手に渡ると次第に悪くなるのが普通ださうてあります。これには色々の原因があることと思ひますが、日本人の可愛がり方が少いといふことも、確かに其の一原因だらうと思はれます。無論學問の

爲に或は食用等にする爲に或は又有害である爲に、動物を殺さなければならぬことが澤山ありませう。けれどもそんな時でも動物に十分に同情して、丁寧に調べるなり十分に利用するなりして、なるべく死甲斐のあるやうにしてやらなければなりません。

二人と猿

皆さんは正月になると狙公が回つて来るのを知つてゐるでせう。猿が狙公のうつ太鼓の音に合わせて色々面白い藝をするのを見ると、たゞさへのんびりとした正月の気分が、益々陽氣になります。動物園等でも猿小屋の前には見物人の笑聲が絶えません。これは猿の恰好といひ、することゝいひ如何にも人間によく似て居つて、外の動物では見ることに出来ぬやうな愛嬌をふりまいたり、滑稽を演じたりするからであります。



先づ我々人間の顔と猿の顔とを比べて見なさい。其の最も違ふ所は額と口先で、猿の額は人間よりも低く、口先は人間よりも突き出て居ります。一たい額の低いといふことは脳の發達が十分でないことを示すのですから、この點から見ても猿の智識は到底我々と比べものにはなりません。けれども人間の中にも亞弗利加の土人のやうに智識の發達の不十分なもの、顔を挿し入れて見ると*



て見ますと、人間は足で物を握れませんが、猿は足で物が握れ、人間は手よりも脚の方が長いです、猿は脚より手の方が長い等の違がありますけれども猿も人間と同じ様に立つて歩くことが出来、手を巧に使ふ事等も出来て人間

に似た所が少くありません。殊に骨格にして見ると一部の大小や長短の違はありますけれども、其の根本に於ては違ふ所がないといつてよろしい。

猿にも色々種類があつて中には猿と思へぬやうな恰好のものもありますが、一般に二つの鼻の孔の間の狭いものは人間に近い高等猿で、其の間の広いものは下等猿とされて居ります。高等猿は亞フリカや亞細亞等の東半球だけに居り、下等猿は西半球に産します。皆さんが普通見てゐる猿は大てい高等猿の方であります。

三 猿の優等生

高等な猿の中でも力の強いこと有名なのは大猩猩即ち「ゴリラ」であります。この猿は亞フリカの西部の森にすんでゐて、身の長七尺、黒い恐ろしさうな顔つきをして、人間の頭等は一撃で砕いてしまふ程の腕力を持つてゐ

ます。これが吼えたとするて遠雷の様で土人は常に獅子よりも恐れてゐますが、常食は果物や木の芽等であります。

よく人に馴れて色々の藝を覚えることで名高いものは猩猩と黒猩猩であります。猩猩は南洋のスマトラやボルネオ等にすみ、身長四尺位、前脚即ち手が非常に長くて歩く時には之を松葉杖の様に使ひます。人が近づくと樹の上から色々なものを投げつけることがあります。人間以外の動物で物を投げることの出来るのはこれ位なものでせう。黒猩猩は亞フリカに居つて、身長五尺位、全身に黒色の毛を持つてゐますが、顔の色は黄て頬髯があります。樹の上に巢を作り、枝や葉を集めて屋根をふき、自分の家族をこゝにすませて近邊に食物がなくなると、そのある方へ引越する等まるで野蠻人のするやうなことをします。人に馴れると色々な藝を覚えて、洋服を着たり煙管を啣へたり食卓についたりするのみならず、自轉車にさへ乗るものがあります。

狙公の連れて来る猿は我が國でも本州、四國、九州だけに限つて居る日本固有の猿で、日本猿ともいふべきものであります。常に山にすみ得意の木上りをして果物や種を取つて食べてゐますが、時に里へ出て大根畑等を荒すことがあります。大きなものは三尺位で五十歳位までも長生するものがあるさうです。感心な事には親子の情が厚くて親が殺されても子は中々逃げないといひます。又大勢が群を作つて一致して事に當ることがあります。

猿に色々の藝を教へることは我が國だけでなく歐洲でも行はれてゐますが、同じ種類の猿でも覺えのよい優等生や覺えの悪い劣等生があるといひます。日本猿の優等生は深い山から捕へて来たものに多く、人里に近い山から捕へて来たものは大てい劣等生ださうです。いくら覺えのよいものでも體格の悪いもの、殊に後脚の發達が十分でないものは、歩く力が弱いので立派に藝をするやうにはなれないさうです。歐洲等でも多くの猿を買込んで之に藝





を教へようとする時、見込のあるものと無いものとを見分けるには可なり苦心をするさうです。ところが或所に之を見わけることの上手な人がありましたが、この人が「どうしてそんなにうまく見わけることが出来ますか」と聞かれた時の返事が中々面白い。「私は新に猿を手に入れた時は先づ之を一室に入れて、色々の玩具を與へて自由に遊ばして置き、よい時を見て急に扉を開いて其の方へ猿の氣を引くやうな事をします。此の時扉の方へすぐ飛んて来るやうな猿は大てい劣等生で、此方に頓着せず前から持つてゐる玩具で熱心に遊んでゐるものは大てい優等生です」と、かう答へたさうです。わき見をせずに熱心に事に當るといふことは、何事をするにも大そう必要なこととあります。願くば諸君、自分の勉強に熱心であれ。そして何事にもよく注意せよ。

四 猛獸物語

獸の中でも牛や羊は氣立がやさしくて顔つきまでおだやかですが、獅子や虎等は氣性が荒い上に、輝いた眼や尖つた齒や鋭い爪をそなへてゐて見るからに恐ろしさうであります。牛や羊は何を食べてゐるでせう。いふまでもなく草や其の他の植物であります。獅子や虎は何を食べてゐるでせう。鹿や山羊等の動物であります。植物を餌とするものは之がありさへすれば樂にとれますが、動物を餌とするものは之を見つけてもぼんやりしてゐては捕へる事が出来ません。して見ると獅子や虎のやうにはげしい氣性を持ち鋭い武器をそなへてゐることは、自分の命をつなぐべき食物を求める上に極めて必要な事でありませう。一般に斯様な動物を猛獸といひます。或動物園に獅子、虎、豹の三猛獸が檻を並べて飼はれてゐました。野に棲



めば何れ劣らぬ荒い氣性のものですからすぐ噛み合を初めるでせうが、既にかう永く隣り合つて暮して見るとさすがに心易くなつたと見えて、或日次のやうな物語を初めました。

豹「申し、獅子君や虎君、お互に何のめぐり合せか軒をならべて毎日顔を見合せ乍ら、未だ一度もしんみりと話あつたことがないですが、今日は一つめい／＼の身の上話や自慢話でもしようじゃありませんか。」

獅子、虎「それは僕達も日頃望んでゐたこと、早速初めませう。」

豹「それでは先づ兩君の生れ故郷からうかがひませう。獅子君、君の生れは何所ですか。」

獅子「僕は亞弗利加生れます。尤も僕達の仲間には亞細亞の西部、印度の西部にもゐないことはないですが、亞弗利加は本國のやうなもので一番多くの仲間が居る所です。何ても大昔は印度の中部にも歐洲にもゐたさうですが、



今では亞弗利加に居る仲間さへ追々少くなるとの音信があるので心配してゐるのです。」

豹「虎君の生れは……。」

虎「僕は朝鮮の生れです。朝鮮といつても今では日本の一部ですから寧ろ日本生れといひたいです。日本人は武勇に富んでゐることは小さい時からよく聞かれたものですが、自分達も武勇にかけては獸仲間てさう引けをとらぬつもり故、何とか日本の獸となつて見たいと思つてゐましたら幸にも思ひ通りになつて喜んでゐます。なほ僕達の仲間は南支那や印度のやうな暖い國に多いますが、西比利亚のやうな寒い所にすむ者がないでもありません。然し亞細亞以外には何處にもすんで居ない筈です。」

豹「よく分りました。それでは僕の生れを申しませう。僕は印度の生れて野に居る時には虎君の仲間にあつたことがあるやうに覺えてゐます。矢張り朝

鮮や西比利亚にすんでゐる仲間もありますが、獅子君のお國の亞弗利加にすむものもあります。

次にめい／＼の自慢話をしようじゃありませんか。矢張り獅子君から願ひませう。」

獅子「僕の最も誇りとする所は我々男子だけにある此の鬣と、雷を欺くやうな吼聲でせう。勿論僕の齒の力や爪の力は中々強いです、然しこの鬣がなかつたら今程に誰も尊敬してくれないでせう。又此の吼聲がなかつたら誰も今程に恐れなくてせう。尤も此の頃のやうに人間から色々大切にしたらへば、吼える必要もありませんから未だ此方へ來てから一度もお聞せしたことがありません。鬣はかうして樂に暮してゐると野に居る時より長く立派になることは確であります。」

虎「成る程獅子君の鬣は立派です。我々の仲間でも君達のことを百獸の王

と噂してゐましたが、初めてお目にかゝつた時にこれこそ世間でいふ王冠であらうと思ひました。僕達の風采はとても獅子君には及びません。然し僕達の顎と爪の力は獅子君にも劣らないつもりです。失禮ですが人間の學者は獅子君の仲間が印度に居なくなつたのは、僕達の仲間と競争の結果遂に此の齒と爪の爲に撃退されたのだといつてゐる位です。」

豹「獅子君といひ虎君といひ何れ劣らぬ風采や武器をお持ちで誠に羨しいことですが、僕の誇とするものは唯だ爪だけです。この爪があるだけで兩君には出来ぬ木上りも自由に出来るのであります。」

獅子虎「木上りは僕達の是非やつて見たいと希望してゐるのですが、どう試めて見ても駄目です。豹君の木上りが羨しくてたまりません。」

豹「獅子君、君の其の毛色は何かわけがありますか。」

獅子「僕達は野に居ればよく乾いた所にすんでゐますが、其の邊の土地と此の色がよく調和して人目をさけるにも餌に近づくにも都合がよろしい。但しこの色は皆同じとは申されません。土地によつても違ひますし又同じ兄弟でももつと黒味を帯びたものや黄味を帯びたものがあり、時には黒色のものも白色のものもありません。」

豹「なる程其の御説明でよく分りました。虎君の毛色は大そう美しいですが、さう鮮な色ではさぞ外の者の目について仕方ありますまい。」

虎「なか／＼さうでないです。僕達はよく繁つた草の中に居ますが、この淡黄色の地に黒い線のはいつた模様は草や草の蔭と調和して、餌になる動物からも老練な獵師からもなか／＼見つからないといはれてゐます。それよりも豹君の毛色こそよく目を引くではありませんか、そんなに黒い紋があつては。」

豹「ところが矢張さうでないのです。僕達はよく木に上つてゐますが、この

色が木の葉等と中々よく調和すると見えて、鹿等もよく氣附ずに下を通る事がありますから割合に樂に飛びかゝる事が出来ます。なほ僕達の仲間では寒い方にすむ者の毛色は淡いやうです。」

獅子「諸君、食物では何が好まれますか。僕は本國亞弗利加の野に居た時に食つた斑馬の味は今に忘れる事が出来ません。其の他鹿や羚羊等の肉も大好きです。けれども餌の見つからぬ時は中々そんな贅澤な事はいつて居られません。仲間の中には困つた時には死肉さへ食ふ者があります。又年をとれば餌をあさる力もなくなり自然野鼠のやうな小さなものを捕へたり。甚だしいのになると草を食つてやつと餘命をつないでゐるものがあります。誠に年はとりたくないものです。」

虎「獅子君、君は人間を食へたことがありますか。」

獅子「未だありません。世間の人は何でも僕達を非常に恐れてゐるやうです。」



豹



が、僕等は野に居る時に人聲がすると却つて逃げたものです。人間は中々恐ろしい飛び道具を持つてゐますから、うかくとして居られません。尤も我々仲間でも何かの事から人間を倒して食べたものもありますが、一度之を味ふと自分の性質が非常に荒くなり、又々人間が食べたくなるさうです。」

虎「食物に就いては僕は獅子君とよく似て鹿や猪等大好きです。ところが鹿や猪は農作物を害しますから此の點からいふと僕等は却つて人間を助けてゐるやうなものです。人間等餘程の場合でないといふと食ひませんが、人間は僕達を人食獸のやうに考へて時々虎狩をするものがあります。此の節も内地から多くの人が虎狩に朝鮮まで出かけたこのことですが、尤もあれは遊び半分に仲間の皮でもとりに行つたのでう。時に豹君、君は随分人間を食ふといふじゃありませんか。朝鮮あたりでは僕達の仲間が君達のやつた罪を負はされて居るやうですよ。」

豹「いやさうかも知れません。實の所僕達も諸君と同じ様なものが好きですが、人間の肉も我々仲間では随分評判がよろしいから、中には人間をねらふものがあるかも知れません。」

獅子「虎君のお話に人間が君達の皮をとりに来るといふことがありましたし、又「豹は死して皮を踐す」といふやうなことをこゝに来る見物人がいつてゐましたが、君達の皮は何になるのですか。」

虎「僕達の毛皮ですか。大した立派なものではありませんが、人間は敷物として珍重してゐます。近頃一枚の價が二百圓から四百圓するとのことです。

けれどもそれが欲しさに虎狩等やらにされてはたまりません。」

獅子「僕達の毛皮は諸君のやうに珍重されません。けれども人間は餘程物好きと見えて、僕達の仲間が飼はれて居る時に子でも産むと、それが猫のやうによく馴れるといつて喜んでゐます。」



虎、豹「それは初めて聞いたことです。僕達の仲間では人に飼はれて居る間に子を産んだ例は未だ聞いた事がありません。」

豹「大分時が移りました。聞けば聞く程珍しい話ばかりですが、今日は先づ此の位にして置いて又時を見て大に話さうじやありませんか。」

諸君は右の物語で三猛獸がどんな獸であるかといふ事がざつと分りてせう。これ等の獸は形といひ、することといひ、猫によく似てゐます。猫によく似た猛獸にはこの外亞米利加に棲む「ピューマ」といふのがあります。色が茶褐色で別に模様がありませんから獅子の雌のやうです。馬でも之に攻撃されるも容易に逃げ得ない位な猛獸であります。

我が樺太にも大山猫といふ猛獸がゐます。身長三尺位で尾は甚だ短く、猫に比べて眼が割合に大きく、耳の先に長い毛が集つて生えてゐるのが特徴です。小さい獸や鳥を捕へて食ひますが、時には小牛を攻撃することがあ

ります。

五 熊と熊狩

今てこそ我國にも獅子にも劣らぬ猛獸の虎を産しますが、まだ朝鮮が併合されない前までは我が國第一の猛獸は熊でした。熊は獅子や虎のやうに如何にも恐ろしいといふやうな姿をしてゐません。又狐や鼬のやうに智慧がまはりません。けれどもどつしりと落ちついた所があつて、如何なる敵に對してもありだけの力を出して向ひ、而も一方に於て非常に無邪氣な所がある等中々見上げた獸であります。

世界に居る熊の主なる種類は白熊、熊、黒熊、眼鏡熊、馬來熊の五種類で、其中眼鏡熊は南亞米利加に棲み、馬來熊は馬來半島等に棲んでゐますが、何れも多少鈍さうな顔つきをしてゐます。白熊は年中雪のとけぬやうな北極地



方にすみ、冷い海水中に平氣で活動して海獸を捕へるのですが、我が樺太や千島でさへ白熊にとつては暖か過ぎると見えて、こゝ五六十年の間に唯一度宗谷海峡の邊に現はれたことがあるだけです。熊と黒熊とは熊中の熊ともいふべきものですが、どちらにも我國に産するのであります。

黒熊は身長が五尺位あつて、光澤のよい眞黒な毛色をしてゐますが、たゞ咽喉の所に三日月形の白い毛がありますので之を月の輪ともいひます。我が國では本州、四國、九州だけに居つて、津輕海峡一つ隔てた北海道には一疋もゐません。それで日本固有のものとしてゐますが、朝鮮及び支那に居るものは少し形が大きいだけで、他の點に於てはよく似てゐますから敢て別種とする程ではありません。猛獸とはいひながら肉よりも木に上つて栗や胡桃を取つて食つたり、草の根を掘つて食ふ事が多いやうです。進んで人にかゝつて來ることは稀ですが、大正六年の秋に日光の中禪寺湖附近にあらはれた

ものは湖水に躍込んで船頭二人を傷け、遂に其の一人を倒しました。黒熊の毛皮は敷物となり、肉殊に掌の肉は中々うまいさうです。又其の膽は胃の薬として貴ばれてゐます。

黒熊は冬になると洞穴にかくれて冬籠をします。熊狩は此の時に行ふのですが、或所では熊の籠つて居さうな穴を見つけるとそれへ粗朶を入れます。熊は引くことだけを知つて押す事を知りませんから、其の粗朶を引きよせて自ら窮屈になつてしまひます。そこで獵師は熊の居所に見當をつけて彈丸を射込むか又は鎗を入れるのださうです。又大和國十津川地方では熊の穴の周りに粗朶を集めて矢來を作り、近邊で賑やかな音をさせて騒ぎたてます。すると熊は怒つて穴から出て獵師に向つて來ますが、矢來に妨げられて行きなやんでゐる所を射るのださうです。けれども若し矢來を飛び越して來るやうな事があれば中々危険で、「自分の被つてゐた頭巾を熊の顔にかぶせて、漸く

危い所を逃れた。」とは私が彼の地を旅行した時に聞いた話であります。

熊は黒熊よりはずつと大きくて九尺位なものも少くありません。千島、樺太に多いのは特に金色熊と呼んで全體の毛色が褐色であります。北海道本島に多いものは大體黒色で顔だけが茶褐色をしてゐます。何れも肩から胸にかけて白い毛があつて、時に月の輪のやうなものもあります。此の熊は露西亞の本國から西比利亞にかけて澤山ゐますが、我が國では樺太や北海道に居るだけて黒熊と反對に津輕海峡一つ隔てた本州には之を産しません。爪が鋭くて木上りが上手な上に力が強くて氣が荒く、殊に腹に子を持つてゐる時分には尙更のやうです。北海道では一夜に三人も食つた例もあれば馬六頭を倒した例もあります。けれども其の齒から考へても實際の有様を見ても、植物動物どちらでも食ふ事が出來ます。即ち四月の雪どけ頃になると冬籠からのこゝと出て來て蕨や玉蜀黍等を食ひ、秋になると山葡萄や柿等の果實をあさり、

又兎のやうな小獸から蟻のやうな昆蟲までも食ひます。なほ川に上つて来る
 鮭や鱒を爪で引つけて食ふ事は有名な話ですが、よく繪にあるやうに捕へ
 た鮭を笹にさして肩にかけて歸るやうなことは實際にはなさうです。冬籠
 してゐる洞穴の口は大てい一尺位な直径で、周りの雪が熊の息の爲に黄色に
 よごれてゐる事があります。洞穴の中では眠つてゐるでもなし醒めてゐるで
 もなしに過しますが、雌は此の間に子を産み乳を吞ますので、四月頃洞穴か
 ら出て来る時分には疲れ切つてゐます。

北海道の土人が熊狩をするには色々な方法があります。洞穴に棒を入れま
 すと、此の熊も黒熊と同様引くことばかり知つて押す事を知りませんから、
 棒を引かうと口まで出て來ます。そこを得たりと槍で突く方法を穴狩といひ
 ます。けれどもアイヌ固有の熊狩はアマツポ狩といつて、熊のよく通りさう
 な叢の中に強い弓を置き矢をしかけて置いて、熊が其の弦に觸れると自然



に箭が弾かれて、熊の胸に突き立つやうにする方法であります。この仕掛弓
 の箭には鳥頭といふ毒草の根と「つちはんめう」といふ昆蟲とを練り合せた毒
 がつけてありますから、熊は其の毒のために倒れるのであります。
 アイヌは熊狩の時に子熊を見つけると之をつれて歸つて、好きな蜜や砂糖
 等を與へて育てます。すると子熊も自分を世話してくれるものをよく覚えて
 頗る従順に育ちます。けれども最早三歳位になるとだん／＼猛獸の本性をあ
 らはし、時々害を加へるやうになります。さうなると之を殺して熊祭にそな
 へるのであります。

六 山犬と狼

諸君は狼に就いて色々恐ろしい話を聞いたことがあるでせう。然し我が
 國で本當の狼の居る所は樺太と北海道だけで、其の外はまた見つか

つたことがあります。それならばよく話に出る狼は何を指してゐるのだらうかといふと、多分山犬を指したのだらうと思はれます。山犬は歐洲やアメリカの北の方に棲み、支那の北部にも我が本州にも居ります。所によつて多少の違はありますが、一般に瘦形で和犬のやうに耳が尖り、毛色は灰色又は淡茶色です。性質は中々荒く殊に飢ゑてゐるものは人里に来て、鶏を取つたり人に噛みついたりすることがあります。我が國でも四五十年前までは信州の善光寺の堂裏に時々あらはれたさうです。又六十年餘り前弘化の大地震があつた時に、一時に多くの人が死んだので、深山に居た山犬が死骸を食ひに人里近く來たことがありました。信州や越後の青年が其の肉と毛皮を樂みに、鐘太鼓を鳴し手練の槍先で高名を争つた勇壯な遊戯も今は昔の物語となつて、本州にも極めて珍しい獸となつてしまひました。少くなつた原因は銃獵の盛になつたことにあるのでせうが、其外に山犬仲間には傳染病が流行

したことや、昔は山に捨てゝゐた牛馬の死骸を今日では色々の方面に利用するので、彼等の食物が足りなくなつたことにもよるだらうといはれてゐます。朝鮮では「ヌクテ」といつて山犬に近い動物が居つて、之が中々人間に害を與へます。朝鮮には銃を持つことを禁じてゐます爲か、年々猛獸のために命を失ふ者が少くないですが、其の中でも「ヌクテ」が如何に暴威を逞しうしてゐるかは次の表によつても明かてせう。

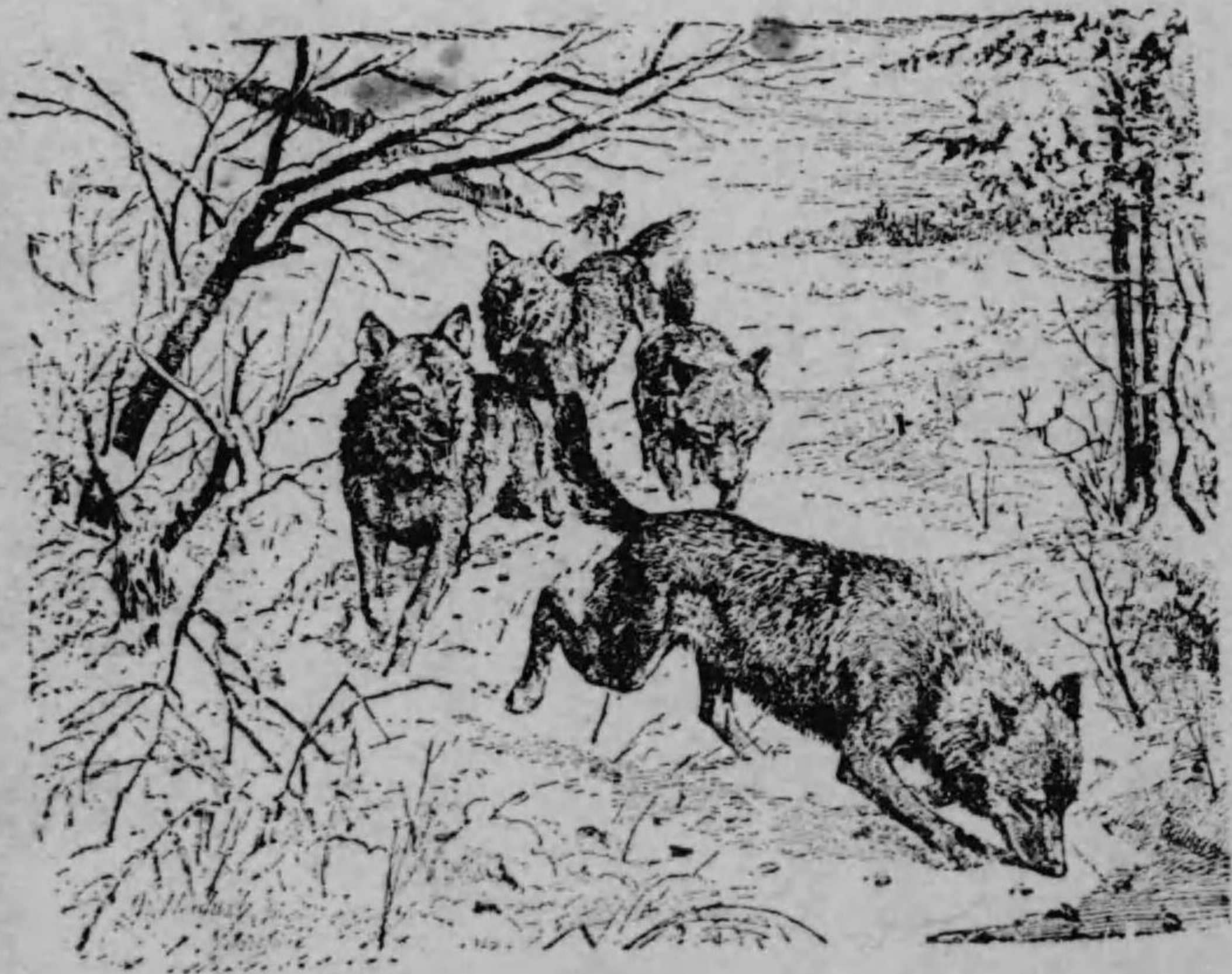
	虎		豹		熊		ヌクテ	
	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年
咬殺された人数	八	四	二	二	四	一四	五四	
咬傷を受けた人数	三	四	五	一三	一三	五〇		
害を受けた家畜数						一九三七	二〇五七	
捕獲された数	一一	一三	四一	九五	二五一	一六八	一一二	一〇六

この表は朝鮮の役所で調べたものから作つたもので、實際の害はこれ以上だらうと思はれます。而も「ヌクテ」の害の甚しいには驚かざるを得ません。それで今ではお上でも一頭十五圓の懸賞で、「ヌクテ」の捕獲を奨励してゐます。

狼は山犬同様アメリカにも歐洲にも亞細亞大陸にもゐますが、我が國では樺太と北海道だけに居ます。容貌も體格も山犬によく似て稍々小さく、夜出て食物をさがします。常にひもじい有様にあると見えて、上は人間より下昆蟲までとつて以て餌にしないものはないといつてよろしい。眼の力と嗅ぐ力とが勝れてゐて中々大膽で、時々大群を作つて人を攻撃することがあります。明治の初め開拓使といふ役人が北海道に渡つた頃は狼が非常に澤山居つて、牧場に居る馬等は随分之が爲に苦しめられたものです。そこで牧場の方でも面白い方法で狼を防ぎました。即ち多くの牝馬に圓陣を作らせて尻



を外の方に向けさせて置き、牝馬に其の周りを走らせるのであります。それ若し狼が近くと牝馬は後足で蹴り飛ばし、牝馬は全力をかけてゐますからさすがの狼も近づくことが出



鹿の足跡を追ふ狼

來ませんでした。而もなほ狼の害が少くないので遂に狼を打ちとつたものには賞を與へるやうにしましたから其の甲斐があつて今では非常に少くなりました。

犬の祖先は何

であるかといふ事に就いては未だよくわかつてゐませんが、「エスキモー」といつて北の方の寒い地方にすむ人達の飼つてゐる犬は、其の邊の狼に非常によく似てゐます。そして狼を小さい時から飼ひ育てると犬のやうにやさしくなり、なほ狼と犬との間に間の子が出来ます。これ等の事實から考へると狼から出来た犬もあるやうに思はれるのであります。

七 嫌がられる狐狸は有用動物

尖つた耳に尖つた口、それだけでもよい感じはしないのに、あの太い尾を地に垂れて小走りし乍ら時々振向き、釣上つた眼で人の顔をじろりと見る姿の氣味悪さ、誠に狐は嫌な動物であります。けれどもこんな感じの起るのは其の恰好のためといふよりも、寧ろ狐は人を魅かすもの、狡猾なものとして、これに就いての色々な話を聞かされて居るからでせう。然しよく調べて見れ

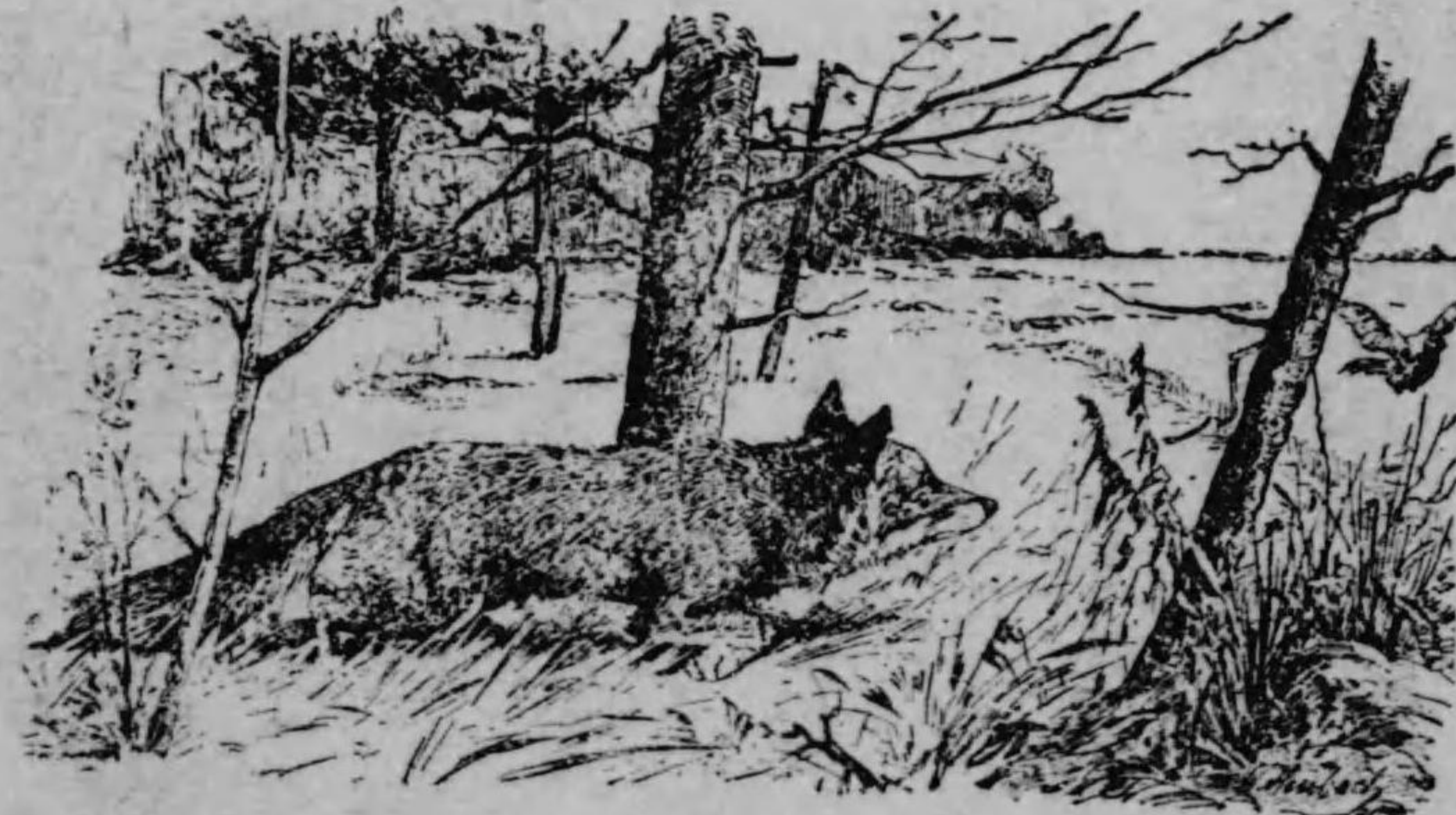
ば狐とてもさう嫌ふべき獣ではないのみならず、却つて有用の動物であることがわかります。

狐は狼や山犬等の猛獸と親類といつてもよい位な動物ですが、人に咬みつくといふやうな事はしません。唯野山に餌が少くなると里に出て来て鶏をさらつて歸るといふ位な事がありますけれども、其の最も好きな食物は野鼠の類でせう。野鼠といへば田畑に大害のある動物ですから、之を食つてくれるといふ事は人間としても喜ばなければなりません。其の上狐の皮は近頃益々珍重されて、悪い赤狐の皮でも一枚四五圓、黒狐の上等になると一枚四五千圓に達するものがある位で、加奈陀邊では盛んに狐を飼つてゐます。之を思へば狐は憎むべきでないのみならず、人間にとつて有用な動物であります。

狐は深林よりも却つて野原に面した山を好んですみ、晝間は大きい穴の中



にかくれてゐます。穴は日當りのよい崖の所に作り、體のは入れるだけの入口があつて、十五六尺の奥に親子の一家族が居ります。感心な事には穴の中が至つて清潔で、穢いものを其の邊に散らして置くやうな事がありませぬ。一度に六七疋



狐 子 雛

の子を生みますが、両親は非常に可愛がつて餌をとつて来てやるばかりでなく、少し大きくなると餌の殺し方等も一々教へます。狐は中々賢い獸で、雛を捕へる時等其の聲を真似て雛を近寄せたり、又枯草が風に轉がるやうに自分の體を轉して餌に近寄つて行く



ものがあります。又犬に追はれる時は深い谷間に望む崖に急に身をよせて、勢よく追ひかけて来た犬を谷底へ落したり、鐵道線路を逃げて鐵橋のかけに身をかくして犬を川へ落したりする様なことがあります。狐は一生の中に四五里以外の所へ移るやうな事は稀ですから、自分のすむ近所の地理に詳しいのでそんなことも出来るのでせう。我が國でもだんく飼つて見る人もあるやうですが、馴れると中々可愛もので飼主の心を察することの早いことは、犬猫のとても及びもつかぬ程ださうです。

次に狸はかち／＼山のお伽噺等の爲にする動物と決められてゐますが、實際はそんなにずるいものではありません。狐と同様野鼠等をとつて食ひますから農業上から見ても有用な獸であります。殊に其の毛は筆になり毛皮は襟巻に用ひられ、又鞆を張るには狸の皮が最もよいとされてゐます。

昔から眠らないで眠つた振りをしてゐることを狸眠といつて横着者やずる

いものゝすることゝしてありますが、狸がそんなことをするかどうかといふことを調べて見ますと、狸は實際眠つてゐるのですけれども、たゞすぐ醒める性質があるので、ずるい眠り方をしてゐるやうに思はれるのであります。けれども此のすぐさめる眠り方は狸のやうな弱い動物にとつては、身を護るに必要なこととてあります。狸はなほ此の外に死んだ真似をすることがあります。これも猛獸の中には死んだ動物には手をかけぬものがありますから、狸のやうな弱いものは逃げる暇のない時に、死んだ真似をするのがたゞ一つの身を護る方法なのであります。而もこんな方法で身を護るのは狸だけでなく弱い動物にはよくあることとてあります。それを狸だけがずるいやうにいひはやすのは少し可愛さうてありませんか。それに狸は前に述べたやうに随分人のためになることをするのですもの。

八 マングースの蛇退治

我が琉球には有名な飯匙蛇といふ毒蛇が居つて、之に噛まれると大抵のものは命がありませんから、非常に恐れられてゐます。今日では噛まれても注射によつて幸に助かることが出来ますけれども、こんな嫌な動物は一日も早く退治してしまひたいものであります。先年渡瀬博士は毒蛇退治の目的で印度から蛇を食ふ「マングース」といふ獸を持ち歸られて、琉球に放たれた事があります。

「マングース」は印度に多く居つて、好んで鼠や蛇を捕へて食ふのですが、不思議なことにはどんな毒蛇に噛まれても決して其の毒に冒されないのみならず、之を平気で食ふのですから、毒蛇を退治させるには最も都合のよい獸であります。この獸は猫の半分位の大きさに鼠のやうな恰好をし、褐色に白色



の緋のある毛を持つてゐます。性質が中々活潑で網等で捕へられる時は大それた荒れますけれども暫くすると馴れてしまつて、肉等を與へると喜んで食ひ、遂には家畜のやうになれて主人の側をはなれなくなる位であります。

「マンダース」は餌として前にいひました通り、鼠や蛇を食ふ外に蜥蜴でも小鳥でも其の他虫等でも皆食ひます。それに就いて面白い話があります。西印度諸島では甘蔗を害する鼠や其の鼠を食つて生きてゐる毒蛇が多いので、是等を退治するためにこの考から「マンダース」を輸入したことがありました。ところがこの獸が鼠や蛇毒だけを食つてくれるならよろしいが、それが少くなるとこれ迄害蟲を食つて生きて居た蜥蜴や小鳥等の有益な動物までも遠慮なく食ふのみならず、大切な果實や甘蔗の味まで覺えて、今度は「マンダース」の害が前の鼠や毒蛇の害よりもはげしくなり、却つて此の獸を退治せねばならぬといふやうなことになつたのであります。

何事も念に念を入れて行はぬとこんなことになることがあるのであります。

九 私は海豹島の臙膈獸

私は海豹島生れの臙膈獸と申す獸であります。海豹島といへば樺太の東南にある小さな島で、日露戦争の結果初めて日本の領土となつたのであります。さて私は此の島で生れたものゝ殆ど年中海の中に居ますから、人は皆海獸と呼んでゐるやうです。尤も私達の祖先は熊や狼と同じ様に陸上に棲んでゐたとの事ですが、海に棲むやうになつてからは陸上の獸とは随分ちがつた恰好になつてしまひました。それでも動物學者は私共の食物や歯や其の他色々の點を調べて、熊狼等の猛獸と同じ類であると決めてゐます。

私達の體で陸上の獸とちがふ所は色々ありますが、其の第一は紡錘形を



してゐることです。これは魚の形を真似たもので、水の中を進むには最も都合のよい形です。それにしても頸が長くてぐらくすると進みにくいますが、御覽の通り私の頸は至つて短かいですからそんな心配はありません。なほ耳もこんなに小さいですから、餘り邪魔にはなりません。私達の四脚は歩くためのものではなく泳ぐためのものですから、鰭のやうな形に變つて舟の楫と同じ働きをしてゐます。それで一時間に四五里も泳ぐことが出来ますし、時には海面から跳ね上つて見たり、お天気でもよければ水面に横になつて晝寝する等自由の活動が出来ます。けれども一旦陸に上ると私の運動は實に無恰好なもので、歩くといふよりも寧ろ匍ふといつた方が適當かも知れません。私の毛は紫が、つた褐色で中々厚く生えてゐる上に、毛皮の下には澤山の脂肪がありますからどんな寒さでも平氣ですが、暖い所は好みません。ですから冬の二三月頃でも下總の犬吠岬の沖から南へは行つ



たことがありません。氣候が暖になると何時も北の方の冷い海を泳ぎまはつて、七月頃になると皆島へ上ります。私共は勿論海豹島に上るのですが此の島は涼しい上に割合に安全なので、昔から土産をするのによい所です。然し何分にも私達の毛皮が人間仲間て非常に珍重されるので、一時は我々の仲間も随分澤山殺されまして、若しそのまゝにして



(大)雄(小)雌の獸臍肭

行けば全滅になると心配してゐましたが政府でもこれではならぬと氣がついたと見えて、近頃は私達を獵することを禁じてくれました。殊に今ではあんな離れ島にさへ警官が来て、私共の番をして

心配もありません。私達の雌は雄に比べると身長が半分程で力も弱いです。そして雄は雌より先に上陸して一家族を作る準備をし、雌は上陸後間もなく子を生まみます。お産がすむとすぐ海にはいつて魚等を追ひまはつて食物とするのですが、時々上陸して子に乳をやりまします。子は一箇月もたてば皆海へはいるやうになります。

海獣の中には私達の恰好によく似た海豹や海驢等がゐて、其の肉や脂肪や皮は皆人間の役に立つてゐます。

一〇 捕鯨船便乗記

紀州の熊野は昔から鯨を捕ることと有名ですが、私が嘗て旅行した時は昔風の捕り方は最早すたつてゐて、唯だ其の邊の老人から如何にも勇壯であつた當時の有様を自慢話に聞かされるだけで、實際の有様を見ることが出来

ませんでした。けれども其の頃はもう諾威式の捕鯨船が澤山入り込んで、毎日鯨を幾頭もとつてゐるとの事を聞きましたから、是非其の船に乗つて大海で鯨を追ふのを見たくなりました。そこで色々頼んだ結果漸く某會社の某捕鯨船に便乗することを許されました。

一月五日、人の顔も未だ十分見えぬ午前五時に船ははや碇をあげて大港から沖に向つた。ところが急に雨が降り出し風が烈しくなつて船の動搖が甚しく、甲板では注意せぬと頭から浪をかぶるやうな事さへあつた。然し船が丈夫に出来てゐると見えて、熊野通ひの商船のやうにメリ／＼とうす氣味悪い音を立てるやうな事がなく、機關の響も非常に静て乗り心地がよい。私は船長や機關長から此の船の構造等に就いて色々聞いたが大體次の通りである。

此の船は諾威製で總噸數百二十一、長さ百二呎、艙の吃水が六呎、舳の吃

水が十呎、速力十一哩、舳の吃水の馬鹿に深いのは荒浪を乗り切る時に推進器(スクリュー)が、空中に出でからまひてもすると機械を損じる恐れがあるからである。なほ此の船の特徴は全速力で走つてゐる時でも急に止めることが出来、而も止つても商船等の様に餘つた蒸氣を出して鋭い音をたてるやうな事がない。若し此の船でそんなことをすれば目的の鯨が逃げてしまふから止ると同時に火力を一時に減ずるやうになつてゐる。又此の船のマストの上の桶のやうなものが括りつけてあるのは其の中へ二人宛交代にはいつて、俗にいふ鯨の潮吹きを見張るのである。

この船の魂ともいふべきは艦に据えてある砲である。昔多くの漁夫達が鯨に近よつて投げた銛は今では此の砲から發射されるのである。而も此の銛は鯨の體に突き入つて爆發するから、一本で鯨を倒すことが出来るのである。銛には簪の脚のやうな柄があつて、之に強い繩がつけてある。此の繩はヒ

リッピン諸島に産するマニラロープであつて、日本の麻繩や棕櫚繩はとても弱くて間にあはぬさうである。

それからそれへと話は盡きなかつたけれども、雨は益々烈しく浪はだん

く高くなるばかりで鯨の潮吹が見えぬから、船は遂に勝浦の港へはいつた。

一月六日、雨は降らぬけれども浪が高い。船は潮岬の邊に出かけたが、此の邊の鯨は黒潮に沿うて泳いで居るから、陸から三十哩の沖が最も鯨を捕るに都合がよい。けれども此の浪風ではとてもそれほど出られぬとのことで、

一日揺られ乍ら一頭も見つからずに船は大島港へはいつた。

一月七日、風がなぎ浪が全く治つて鏡のやうになつた海上を、後の山がかすかに見える所まで乗出して暫くうろくしてゐる中に、一哩程前方に赤坊鯨といふのがあらはれた。船は全速力で進行したが、鯨は三四回潮を吹いただけでかくれてしまつた。この鯨は三十分以上もたぬと再び浮いて來ない

上に、一頭の値が僅に百三四十圓で砲手の賞與もビール一打位であるから、船員はビールワンと冷笑してかへり見ない。船は再び大地に入港してしまつた。

一月八日、明日はどうしても此の地を立たなければならぬのだから、今日の中に是非一頭を獲たいものだと思心に祈つてゐたら、午後三時頃見張のものが「見えました」と叫んだ。私は思はず立ち上つた。船長は「まだ遠いです」とゆつくり茶を呑んでから船橋へ上つて行つた。私も續いて上つた。遙向ふを見るとなる程一漣ばかりの前方に高く潮を吹くものがある。船員の顔には勇氣と希望の光が閃いてゐる。船は全速力で走り出した。

船橋上の船長は噴水と時計とを見較べて一分半、三分、五分……等とよんでゐる。鯨は十二三回も續いて潮を吹いた後沈んでしまつた。船は行き過ぎることを恐れて前方に氣を配りつゝ、徐に進んだが、やがてストップ（止れ）

の命がかつた。大勢の眼が八方へ働くと思ふ間もなく、船首より五六間前方に青い象の頭のやうなものがぬつと浮き上つた。睨んでゐた砲手の指が引金に觸れると同時に轟然一發、銛は太い繩を引いたまゝ飛び出て鯨の背中に命中した。鯨は沈んで行く。銛についた網は目にも止らぬ勢で引かれて行く。要所に水を注ぐもの、油をさすもの、砲手のはりさけるやうな諸威語と手真似、中々の騒である。鯨ははげしく沈んで行つて、銛についた四百尋の網も今は僅に二三尋となつて船員が皆心配顔をしてゐると、鯨は再び遙向ふの方に浮き上つた。船は或は進み或は退いて鯨を追うた。網によつて互につながれてゐるから鯨に逃げられる心配はないけれども、一向弱つた様子が見えぬ。多分銛が突き立つてから爆發しなかつたのであらう。而も日は追々暮れかゝつて來たので船長は折柄來合せた他の捕鯨船に援けを乞うた。彼の船は承知してだんくんと鯨を追ひつめ、十二三間の所から銛を發射した。命

中したと思ふ間もなく銛の爆發した音が聞えた。オールライトの聲が甲板に起つた。鯨は血の噴水を三四回たて、尾羽を水面より三十尺も上げてずんぶと沈んでしまつた。いふまでもなく絶命したのである。

鯨は我が船に引きよせられて船首に括りつけられた。この鯨は長簧といふ種類で、鯨中でも大きい種類である。百呎に餘る此の船の長さど殆どかはらぬ所を見ると九十尺もあつたらう。亞鉛引のバケツのやうな色をしてゐる。之を大地へ引いて歸つたのは夜の九時頃であつたけれども、其のまゝにして置くくと肉が食へなくなるので、直に解剖に取りかゝつた。

一一 牛と馬との自慢話

或所で牛と馬とが次の様な自慢話を初めました。

馬「牛君、君の歩き方は随分のろいですね、それではとろい時に間にあ

ひますか。僕等の駆け振りを見給へ、鬘を風に吹かして矢の様に走る所は實に立派なものでせう。」

牛「左様、何分こんな太つてゐる割合に脚が短くて其の上蹄が二つに分れてゐるのですから、君の様に細長い脚に一つの蹄しか持たぬものに比べると駆けつゝ等及びもつきません。然しこれにて中々長つゝきがしますし、我慢も強いです。殊に力業にかけては君等とても足もとにもよりつけないてせう。

馬「なる程君は力が強い。けれども敵と戦ふ時に其の力をどう利用しますか。僕はさう強くない敵ならばこの後脚で蹴飛ばし、とてもかなはぬ敵と思へば得意の駆足で逃げてしまひます。」

牛「それは無用の御心配です。僕には御覽の通りちゃん立派な角といふものがあります。この角は君の鬘の様に飾としてあるのではなく、これにて敵を突きまくるのです。尤も僕にも君と同様とてもかなはぬ敵がある。今でこ

そ人間のお世話になつて呑気に暮してゐますが、祖先が野に居た時にはなるべく猛獣に出逢はないやうに注意してゐたやうです。」

馬「それでは食ふものもゆつくり食ふことが出来ないうぢやありませんか。」
牛「所がそれにはまた都合のよい事があります。僕の胃袋は君のところが四つの室から出来てゐます。それで若しよい草等が見つかると安全な中に出来るだけ多く食つて胃袋の第一室に詰め込むのです。勿論この時はとても十分に噛みこなすわけに行きません。けれども安全な場所に退いた時には前に食つた食物を第二室から口へ戻して、十分噛みこなし之を再び呑み込んで第三室へ送ることが出来ます。今でも僕達が何も口へ入れないで、而もさうな口許をして何かを口にしてゐるやうに見える事のあるのはそれです。」

馬「君は何か人間の爲になつてゐますか。僕は立派な軍人に乗せて戦争に

行つた事があります。何分にも足が早い上に氣が利いてゐますから、戦争の時等中々よく間に合ふといつて何時も褒められてゐます。なほ仲間の中には馬車をひくもの、荷車をひくもの、田を耕すもの等があつて、何れも力一ぱい人間の爲に働いてゐます。」

牛「僕は君の様に軍人に乗せて戦争に出かけた事はありません。然し其の他の力仕事は大抵してゐます。而も君のやうに少し苦しいと途中で立往生するやうな事はありません。それに僕達の肉と乳とは人間の最も好むもので、之で人間の健康をどれだけ増して居るかわかりません。其の他皮は革細工に臓腑は肥料に骨は骨細工に蹄は籠甲代用に用ひられて何一つすてられる所はありません。」

馬「僕達の肉だつて人間に食べられてゐますが、君等のやうに喜ばれる程の味はないと見えます。けれども皮、骨、蹄、臓腑等は君等のご同様に利用

される外に、毛は刷毛に作られ殊に尾の毛はバイオリンの弓糸となります。それに僕等の仲間には人間の爲に身を苦しめて、ヂフテリア等の血精を作るに用ひられてゐるものがあります。」

牛「僕等の仲間でも種痘の爲に一身を捧げてゐるものもあります。」

諸君は右の話で馬と牛との特徴が大體わかつたてせう。何れも蹄を持つてゐますから、牛馬等の仲間を有蹄類と呼んでゐます。そして馬の蹄は人間の中指即ち第三指に當り、牛のは中指と薬指即ち第四指に當ります。また牛のやうに一度胃袋に入れた食物を再び口に出すことを反芻といふのであります。

一二 沙漠の船

アフリカの北の方にはサハラ沙漠といつて、見渡す限り砂ばかりの廣い

荒地があります。この邊はたゞさへ暑い所であるのに、まして沙漠は雨が少く草木が稀ですから地面が乾き切つて焼けるやうな暑さであります。従つてこれを旅行する者の困難は並大抵ではありません。幸に此の暑い沙漠を平氣で歩ける駱駝といふ獸がゐりますので、商人等は之に荷物を負はせて旅行するのであります。それで一般に駱駝の事を沙漠の船と呼んでゐます。

駱駝は沙漠の砂のやうに茶褐色の毛を持つた獸で、體の大きい割合には頭が小さく、眼は二重脣で見るからに温順らしい獸です。足には牛と同様二本の指に大きな蹄をそなへてゐますが、牛の様に指の先で歩くのではなく、指の下にある靴底のやうな固い所を地につけて歩くのですから、固い所でも熱い所でも苦もなく歩く事が出来ます。

駱駝は牛と同様反芻する外に、胃の第一室と第二室との壁に水袋がついてゐるので、長い間水を呑まなくても我慢が出来ますが、之が又水に不自由な沙

漠を通るには誠に都合のよい事でありませぬ。然しこの水袋の効能に就いては、世間で少しく大げさにいひ過ぎてゐます。例へば麒麟等は駱駝の様に特別の水袋は持つてゐませんが、駱駝よりもずっと長く水にこらへることが出来るのです。

脊中に一つの瘤があります。これは皆脂肪から出来てゐて、食物の足りない時等にはその代りとなるのです。それですから非常に働かせるか又は長く食物を與へないと此の瘤は軟くなつてしまひます。之に反して食物が十分ならば固く張り切つてゐます。

駱駝が休息時には脚を曲げて例の靴底のやうな固い足の裏を胸につけて正しく坐り、決して牛等のやうに體を一方に捻るやうな坐り方はいたしません。毎日六七十貫の重荷を負うて十四里位な道を平氣で歩き、而も僅な小麥と、沙漠の所々に生えてゐる草等を食つてゐれば十分であると聞いては、驚かす

には居られませぬ。

駱駝は沙漠の船として重寶な動物ですが、なほ其の肉は食用になり乳は飲物になり毛は織物の材料となるのであります。又其の骨は殆ど象牙のやうに緻密なので象眼細工に用ひられます。

二瘤駱駝は少し大きくて支那等に多く、北の方はバイカル湖附近まで行つてゐます。名の通り脊に瘤が二つあります。

一三 荒い野猪と暢氣な豚

野猪と豚とは見た所非常によく似た獸であり乍ら一は野山に棲んで氣性が荒く、一は人に飼はれて性質が極めて暢氣であります。

一般からいふと蹄を持つ獸は大抵草を食つて性質がやさしいのですが、野猪だけは特別で植物でも動物でも食つて、猛獸といつてもよい位な勢のよ

い獣です。彼の富士の巻狩に飛び出た大野猪には誰一人向ふ武士がなかつたのを漸く仁田四郎といふ勇士が刺止めたことは有名な話であります。朝鮮等て猛獸狩に経験のある獵師の話によると、虎はあれ程の猛獸でありながら一發の彈丸を受けても餘程弱るさうですが、野猪は一發位な彈丸を受けた方が却つて元氣がよくなるさうです。甚しいのになると腹に九發の彈丸を受け、血が流れ腸がはみ出る位になつてゐても、なほひるまないて進んで来るさうです。昔から進むを知つて退くことを知らぬ武士をば猪武者といつたのはなる程うまい、ひあらはし方であります。

野猪は歐洲にも亞細亞にも亞米利加にもゐますが、我が國では北海道と樺太には之が居ません。尤も樺太の貝塚からは其の骨を掘り出した例がありますから、大昔には居つたのかも知れませんが、頸の短い人を猪首の人といふ位で野猪の頸は至つて短いです、顔は長くて鼻先が太く、こゝに澤山の神經



が来てゐますから、物をさぐる感じが頗る敏いのであります。齒は何れもよく發達し、殊に牙はのびて外にあらはれてゐます。そして下顎から生えてゐるものは年と共に伸びて遂に後の方へ曲りますから、之が攻撃の武器として役立つのは若い時だけであります。之に反して上顎から下を向いて生えるものは年と共に曲つて、却つて上向きになりますから之が攻撃の武器となるのであります。身體には剛い毛と軟い毛があつて、頭から脊にかけて剛い毛の鬣があります。小さい時の毛色は一般に黄味が、つた地に赤黒い條があつて、まるで瓜のやうて可愛らしいから瓜坊と呼ばれてゐますが、大きくなるのに従つて焦茶色に變つて來ます。日中は繁つた森の中に落葉や枯草を集めてすみ、夜になると例の鼻先でグーグーといひながら植物の根を掘出して食ふのですが、食はない分までも悪戯に掘出して、一夜の中に數百歩の田畑を荒すことさへあります。植物の外は他の動物は勿論、ことによると自分の

子を食ふ事があります。

昔將軍徳川綱吉が殺生を禁じた頃は、我が國の對馬では野猪の害がはげしくて農作物が皆駄目になつてしまつた事がありました。而も愚な島民は野猪は島の主であるとか、將軍様の命令が恐ろしいとかといつて一向之に手をつけようとしませんでした。けれども陶山庄右衛門や平田類右衛門といふ偉い人があつて、自分の命を的にかけて十年もかゝつて島の野猪を退治してしまひました。それからこの方二百年になりますが、島民は相かはらず二人の恩を受けてゐるのであります。

野猪の肉は脂肪が多くて味がよろしから東京でも山鯨といつて、冬になると何處の肉屋にも釣るしてあります。毎年十一月頃から翌年一月にかけて東京へ入込む臍腑拔きの野猪は約三千頭で、主な産地は丹波と丹後ださうであります。



子親の猪野



豚は野猪から變つたものですから、互に似合つてゐることに何の不審もありません。但し我が國の豚はもと支那や暹羅から輸入したものですから、我が國に居る野猪とは何の關係もなく寧ろジャワ、スマトラ邊に居る一種の野猪から變つたものらしいです。近頃盛んに輸入される歐洲の豚は歐洲南部の野猪や中央亞細亞の野猪から變つたものとされてゐます。

さて豚はいふまでもなく肉をとる爲に飼はれてゐるのです、祖先の野猪が氣が荒いに引きかへこれは極めて吞氣で、どんな穢い食物でも平氣で平げ、而も何時もまる／＼と太つて中には満足に歩けないものさへあります。又傷を受けても別に痛さうにもせず、食物を暫く與へなくても飢え死にするやうなこともありません。牙はあつても小さくて無論口外に出てゐませんから、顔つきも至つて鈍さうです。それで外國では冬等の豚に與へる食物が十分でない時節には、澤山の豚を地下室のやうな暗い所に幾日も／＼も押込めて置

荒い野猪と暢氣な豚

いて春になつて草等の食物が十分になつて來ると之を引き出し、一度に食はせて十分太らせ、それを市場に賣り出すといふやうなひどいことをするものもあるさうです。然し斯様な飼ひ方をされてもさう飢えもせず又病氣もせず人間に思ふ通りになるとは、誠に驚くべき暢氣さかげんではありませんか。

一四 毛織物の母

多くの人が着てゐる着物は木綿か絹かさうでなければ毛織物であります。其の毛織物を作る毛を我々人間に與へる者は即ち羊です。羊は斯様に大切な獣ですから、今では人に飼はれて色々な種類が出來てゐます。圖は羊の主な一族を示したもので、角のあるものないもの、毛の長いもの短いもの等様々です。従つて其の祖先はどんなものであつたか、今によく分つてゐませんが、多分一種類から出たのでなからうと思はれてゐます。其の特徴は一般に

頭の後方が圓いこと、角が弓形又は螺旋形に曲つてゐること、口が小さいことと等て、牛と同じ様に反芻し、蹄も二つに分れてゐます。

普通毛織物と呼び乍ら、之に普通の綿を混じてゐるものがないてもありません。けれども之を顕微鏡で見ると羊の毛には澤山の節があり、綿にはそれがないからすぐ區別がつくのであります。

山羊は主に肉と乳がよいために人に飼はれる獣ですが、其の毛も毛織物の材料となります。大體羊よりも元氣で、雄には特に鬚鬚があります。

アルバカといふ毛織物はアルバカといふ獸の毛を織つたものであります。

アルバカは南亞米利加に居つて寧ろ駱駝の仲間に屬し、顔の恰好等駱駝によく似てゐますが、黒色の地に引きずるくらの長い毛を持つてゐますから、毛織物の材料としては都合がよろしい。それで所々で飼ひ試して見ましたが今にうまくは行きません。即ち南亞米利加の特産であります。

一五 奈良の鹿

秋が来れば紅葉を想ひ、紅葉を見れば鹿を想はずに居られますまい。昔から數ある獸の中で、最も多く歌によまれ繪にかゝれたものは鹿でせう。我が國で鹿の澤山居る所は奈良で、あの自然そのまゝの森や山や野を含み、謂れの多い社や寺に富んだ廣い美しい公園は、この鹿によつて一層の趣をそへるのであります。

鹿の種類にも色々ありますが、奈良の鹿は我が國で最も普通な日本鹿であります。けれども昔から春日神社に仕へる神鹿と稱して保護せられ、遊覧の客から餌を恵まれて暢氣に育つてゐる爲か、普通の野生の鹿に比べて大きいやうであります。

毛色は大體茶褐色ですが、脊筋は黒色で、尾と臀と腹が白色になつてゐま



す。なほ後脚の踵即ち普通脛と誤つてゐる所の外側に、一つの圓い白紋があります。奈良の人は之を春日明神の御紋であるといつて、あそこの鹿特有の紋だと思つてゐますが、もとよりそんなわけはありません。然し鹿の毛色は季節によつて變るもので、夏の毛色は茶褐色に黄を帯びて光澤があり、その上白色の班紋が鮮かて所謂「かのこげ」を呈して大そう美しいです。斯様な色ではさぞ他目を引くだらうと思はれますが、實際はさうではありません。緑の濃い草木が強い日光を受けて紋形の影を大地に投げてゐる邊りに鹿が居ると中々見つかりにくいものであります。秋風が吹いて草木の緑があせるに従ひ鹿の毛色も次第に變つて灰褐色になり、白紋も餘程分りにくくなります。それ故に紅葉に鹿の繪で「かのこげ」を餘りにはつきりとかくのは實際とちがつたものになります。冬になれば毛色は益々枯野の色に似て來るが、春になると再び美しい色になり初め、五月頃になれば大かた夏の毛色になつてし

まひます。奈良に有名な嫩草山があつて四季折々に草の色が變つて行きますが鹿の毛色は此の嫩草山の色と伴つて變つて行くのであります。

牡鹿は頭に立派な角を戴いて居りますが、其の大きさや形は年と季節によつてちがひます。先づ三四月頃になると頭に紫がかつた褐色の瘤のやうな突起が出来て次第にのびて行きます。之を普通袋角といつて握つて見ると軟かく暖て、殆ど瘤と異なる所はありません。六七月頃になると餘程固くなつて枝も整ひ立派な角の形になりますけれども、未だ皮膚を被つてゐてそれに毛が生えてゐます。然し其の皮膚は次第に乾いて八月下旬になるとだん／＼剥げ初め、自分でも木の幹等に擦つて之を剝がうとします。公園内の木の幹が割竹で包んであるのは鹿がその角を擦るために幹が傷つけられるからであります。

九月の中頃になると大抵の牡鹿は立派な骨質の角を戴くことになりませんが

而も此の角は年末から翌年の三月頃までに、木の葉の落ちるやうに落ちてしまひます。奈良では角が自然に落ちる前即ち十月の中頃に角伐の式を行つて切り落すのであります。六月頃に生れる子鹿は其の年の中には角が生をません。二年目に初めて角が生えますけれども、此の時には未だ枝が出来ません。枝の出来るのは三年目以後で、幾ら成長しても三枝より多くなることはありません。一體角の出来る九月頃は鹿の結婚時期で、此の頃になると牡鹿同士が堅い角で突合ひをすることがあります。お伽噺等で鹿の角を無用な物のやうに思つてゐる人があるかも知れませんが、此の時には確に有用な武器であります。

角伐りの式は春日神社の年中行事の一で、随分多くの見物客が集つて來ます。廣く結ばれた矢來の中に鹿を追廻してこれを捕へ、遂に鋸を以て其の兩角を切り取る様子は見る者によい感じを與へません。土地の者は此の角伐

りに依つて名産の角細工の材料を得ると共に、性質が荒くなつて居る折柄、遊覽人に害を加へないやうにするのであるといつて居ります。然し店頭にならべて客に賣りつける角細工は、大抵牛の骨から造つたもので、眞の鹿の角には澤山の縦條があるのて直ぐ見分けることが出来ます。角が出来るときには根本から非常な勢で血液が流れて来て、其の中に含んでゐる石灰分を次第に硬めて骨質にするのですが、縦條は此の血管の痕らしいです。

鹿の脚は細長くて走るに都合がよろしい。蹄は牛のに似てもつと尖つてゐます。牝鹿にとつては此の脚が一つの武器で、子鹿に近づかうとした一學生が其の母鹿に此の脚で打れたことがあります。

鹿の最も好む餌は榎の果實で、その他豆、芋、嫩葉等皆好物であります。春夏秋の遊覽客の多い時は、恵まれる餌に飽いてゐますから農作物を害することも無いですが、客の少ない上に草木の枯れた冬の日には盛に農作物を害しま

す。奈良の市外に通ずる要路に門があつて金網の戸が備はつてあるのは、夜之を閉ぢて鹿の田畑に出るのを防ぐためであります。又公園にある灌木にアセビの多いのは、此の木が有害であるために鹿の害を受けないからであります。

一六 馬鹿の議論

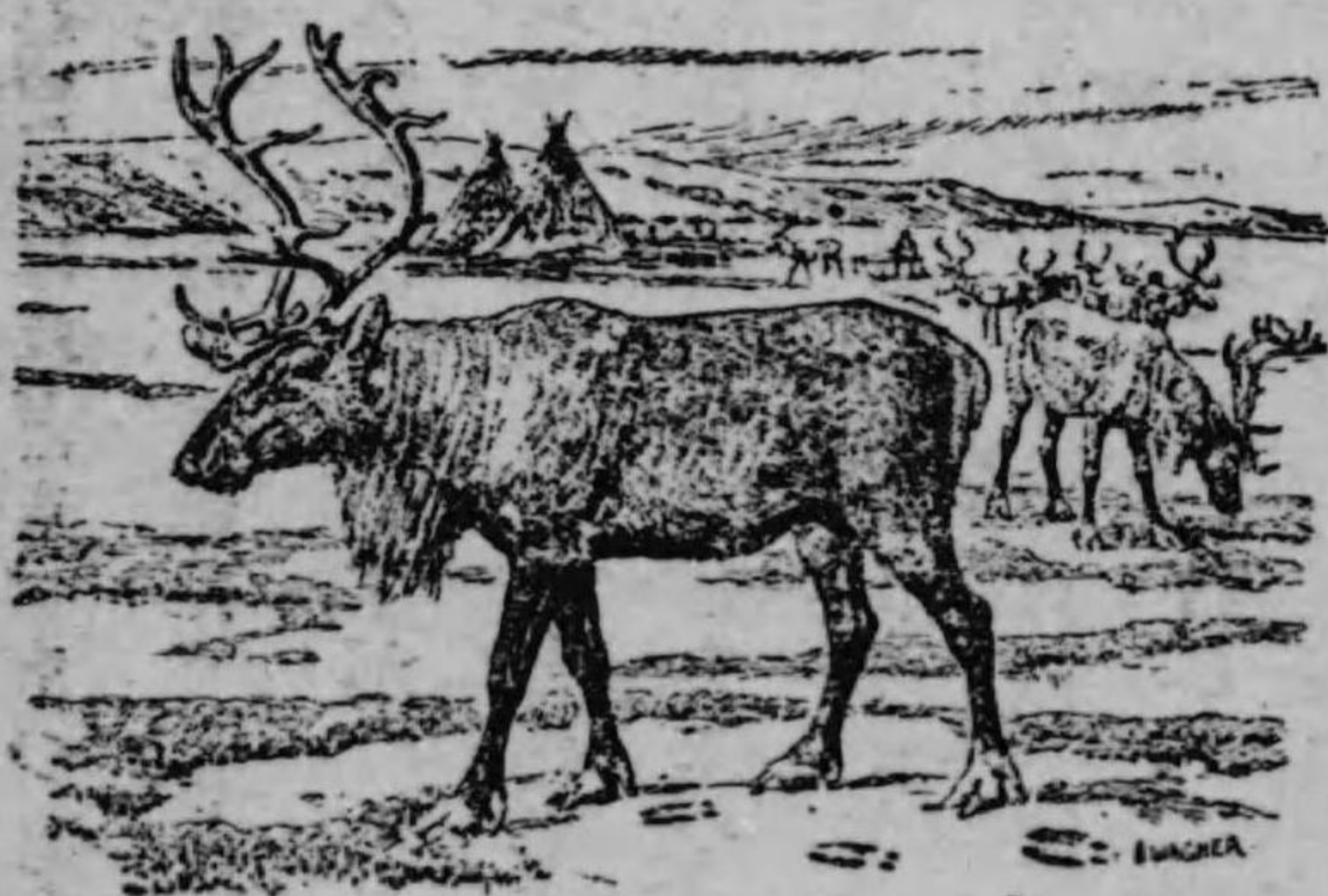
昔支那が秦と呼ばれた頃、或王様の所へ鹿を馬だといつて献上したものがありません。けれども其の時の役人達の中では之を馬であると言つたものと、又鹿であるといひ張つたものがあつて、それが果して馬であるか鹿であるかといふ事に就いては容易に決しませんでした。即ち馬鹿の議論に花が咲いたのであります。一見してもすぐ區別のつく馬と鹿の判定に就いて議論をする等といふことは、誠に馬鹿氣たことのやうですが、此の時献上した鹿は四

不像といふ種類で、角が落ちてゐる時に見ると、西洋人でも初めは驢馬と間違へたさうです。無理でもなかつた事でせう。四不像といふ名は此の獸の蹄は牛に、頭は馬に、身體は驢馬に、角は鹿に似てゐるが、而も牛でも馬でも驢馬でも鹿でもないといふ所からつけられたのださうです。角は前に出る枝がなくて後に出る枝が非常に長くのび、なほ角の表面には浅い溝が平行して澤山あります。

此の獸は東洋固有のもので、支那の清朝歴代の御獵場であつた南苑に飼はれてゐましたが、近頃度々動亂があつたので保護が行き届かなかつた爲め、惜しい事には本家本元といふべき支那に、其の姿を見ることが出来なくなりました。幸に支那から歐洲に輸入されたものはよく殖えて二百頭計りになつてゐます。そして生きてゐるものは世界中で之だけでせう。我が國では上野の動物園に飼はれてゐたことがありましたが、今では死んで博物館に皮を残し

てゐるだけであります。けれども千葉縣の石原郡にはこの角の一部が掘出されたことがあります。それから、我が國にも大古には棲んでゐたかも知れません。

一七 樺太の馴鹿



あります。中には普通の鹿と同様に野生してゐるものもありますが、又人に飼はれて家畜のやうになつてゐるものもあります。樺太では主にオロツコ人が飼つてゐますが、飼はれてゐるものの方が野生のものより少し體が

小さいです。形は鹿に似てゐますけれども、もつと大きくて脚も太く丈夫に出来てゐて、鹿のやうに身軽てはありませぬ。鹿と同様第三と第四の趾が発達して之に蹄をそなへてゐることは勿論ですが、鹿や牛では地に着く程発達してなかつた第二及び第五の趾も可なりよく発達して、之を地に着けて歩きますから、雪を踏んでも足が深くはいつてしまふやうな事はありません。而もまた堅い山地でも中々達者に歩くことが出来ます。

一般に脊の方の毛色は濃い褐色ですが、鼻、頸、腹、脚等の毛だけは白いです。けれども諸君は動物園等で一體に灰色若しくは殆ど白色を呈してゐる馴鹿を見たことがあるてせう。あれは大抵一年を取つたものであります。年をとると褐色の所までが白けた灰色にかはり、時としては殆ど白色になるものがあります。なほ同じ馴鹿に就いて云へば、冬の毛色は夏の毛色よりも白いです。頸の下には長い毛があるのが普通です。

頭には角をもつてゐますが、其の枝振は中々立派で、大きなものになると五尺に達するものがあります。そして株の所から前方に分れて出てゐる枝は先が平たくなつてゐます。普通の鹿は大抵一年以上たゝぬと角が生えませぬ。而も牡に限つて生えるのですが、馴鹿では生れてから二月もたてばはや牡牝共に生え初めます。尤も牝の角は牡よりも枝が少なくて小さく且落ちる時が牡よりも後であります。

此の獸は雪の降らぬ時節には森にゐて、草や木の葉や苔蘚等を食ひますが夏蚊に苦しめられる時分になると森を出て來ます。冬が來て草木の葉がなくなると、雪の下に埋れてゐるイスランドゴケ等を食ふのですが、之を掘出すのに角の前に分れ出てゐる枝と足を巧に使ひます。イスランドゴケといふのは梅の幹などによくつくウメノキゴケなど、同じ種類の植物ですが、馴鹿の好物ですから東京の動物園では之を樺木から取りよせて與へてゐます。



麝香の持主

オロツコ人は馴鹿に乗つたり、色々の荷物を負せたり、又雪の上に櫓をひかせたりしますが、一日によく四十里位の遠い道を走るさうであります。肉の味は鹿に似て食用になり、毛皮は防寒の衣服其の他種々の日用品に作られ特に毛の短い脚の所では長靴を作ります。而も放ち飼にして置いてよいのですから誠に都合のよい獣であります。

一八 麝香の持主

麝香は誰知らぬものもないよい香のするものですが、一たいこれは何から取るのでせうか。今日廣く使はれてゐる香水は、大たい色々の薬品を調合してこしらへたものですが、麝香は麝香鹿といふ獣の雄の腹から出たものであるります。

麝香鹿は普通の鹿と同様蹄があつて反芻を行ひ、印度や支那の高地にすみ



麝香の持主

麝香鹿

我が國では樺太だけに居ますが、然し中々珍しい獣です。頭には牡牝共に角がありません。けれども雄の上顎にある牙はよく發達して口の外に出てゐますから、これによつて雌雄の區別はすぐつきます。一般に黄色がかつた赤色、又は灰色がかつた褐色で、前脚は後脚よりも長く、それに蹄が堅くて尖つてゐますから、高山の岩の上等をかけるに都合がよろしい。晝間は深林にかくれてゐますけれども、夜になると出て来て、木

の葉や草や苔蘚等を食ひます。腹から出す麝香は黒色の餿頭のやうなもので之に近よると香が餘り高いので、頭痛を催す位であります。それて之を使ふには餘程うすめなければなりません。

一九 麒麟と河馬

諸君は動物園で麒麟と河馬とを見たことがありますか。此の兩動物はどちらも亞弗利加に棲み、何れも蹄を持獣であり乍ら、麒麟の方はすらりとして丈の高いことにかけては獸中の第一ですが、河馬の方は之と反對に丈が低くてまるくと太り、目方の重いことにかけては犀の次であります。

麒麟の高いものは一丈八九尺にもなりますが、之は頸と脚とが長いのによるのであります。然しこの長い頸でも心になつてゐる骨は、外の獸と同様七個の骨のつながつたもので、短い河馬の頸の心になつゐる骨も同じ數からな

つてゐます。つまり獸は皆同じやうな型に出来てゐますが、暮し方のちがふに従つてこんなに変つて來たのでせう。即ち麒麟は常に此の長い頸をのばして、高い樹の嫩葉を食ふのですが、それには中々都合がよろしい。足は牛や鹿と同様各二つの蹄を持つてゐますが、第二第五の趾は全くありません。なほ前脚は後脚よりもづつと長いですから、長い頸と相待つて高い所にあるものを取るにはよろしいが、下を向いて水を飲むやうな場合には、前脚が餘り長すぎて口が下にとどきませんから、之を八の字形に開いて頭をさげて如何にも不便利らしい様子をします。

頭は小さく眼は大きくてよく光つてゐますけれども、何となくやさしく見えませす。鼻は駱駝と同じやうに開閉が出来、舌は長くて運動が自在ですから樹の葉を掴み取るに便利です。角は牝牡共にありますが、短くて枝もなく、たゞ上に皮膚を被つてゐます。そして生れたばかりのものでも角を備へてゐ



ますが、中の骨が十分固まつてゐないと見えて、後の方へ倒れてゐます。
 麒麟は亞弗利加の中でもよく乾いて樹木の餘り繁つてゐない所に棲み、大勢群まつて居るのが普通であります。獅子が最も恐るべき敵で、之にあふと一裂にされますが、敏い眼と鼻とで敵の近よるのを覺ると忽長い脚を利用して逃げてしまひます。それに栗色に白ひ網摸様のある毛色は、自分の棲む所とよく調和して容易に見つかりません。麒麟の歩き振りは悠々として中々立派ですが、飛ぶ時には長い頸を前後に振り尾を真直に立て、後脚を殊更に蹴り、其の様子が如何にも滑稽に見えます。
 麒麟の上品なのに引きかへ、河馬は至つて無恰好な見にくい獣であります。河馬といつても馬には一向似てゐません。強いていへば豚に近いといつてよいてせう。肥え太つて體重六百貫、身長一丈五尺もありながら、高さが僅に五尺で麒麟の四分の一にしか當りません。太い短い脚には蹄が四つづゝあつ



麒麟と河馬

けれども、何れも大きく鋭くて、
 而も絶えずのびてゐるのであります。
 眼鼻耳は何れも割合に小さく
 て顔の大部分を水に浸しても此等は水面上に出るやうな位置にあります。體には毛が殆どなく皮膚か

て何れも地についてゐます
 頭は四角ばつてゐて、口や
 鼻の邊が非常に廣く膨れ、
 齒はまばらに生えてゐます*

らは血の様な赤い汗を出します。その子は水中では多く母親の脊に負はれてゐます。

此の獸は亞フリカだけに居つて、多くは水の中に居りますが、足に特別の仕掛がないけれども中々達者に泳ぎます。そして晝の中は顔の一部だけを水に浮かして静かに呼吸をしてゐますが、夜になると中々活動します。歩き方は頗る無恰好ですけれども、思つたよりは活潑で、時には一つの池から他の池へ移轉することがあります。中々の大食家で主に水草を食し、時には作物を荒すこともあります。けれども流れを妨げる草を食つて河掃除をしてくれますから、左程の有害動物ではありません。時々人を襲うて土人の舟に咬みつき、稀には河蒸汽にさへ向つて來る事があります。之を銃で撃ちとることは中々困難です。それは前にもいつた通り顔の一部しか水面上に出してゐませんから。それで多くは落とし穴で捕へます。肉は味がよく、脂も皮も齒も皆そ

れぐ役にたつてあります。

二〇 角比

これまで述べた蹄をもつ獸の仲間には大分角のあるものがありました。一體角は何の爲にあるかといへば、いふまでもなく一つの武器であつて、他の獸と戦つたり仲間同士が喧嘩したりする時には大てい之を使ひます。けれども中には武器として働くよりも、たゞ一つの飾物となつてしまつたものもないてはなりません。今は死絶えてゐますけれども、鹿の類で左右に出た角の端から端までが二間もあつたものがありますが、かうなると最早大き過ぎて武器としては役立たないで却つて一つの飾物であつたらうと思はれます。羊の中にも飾物としては申分のない程立派に曲つた角をもつてゐるものがありますが、あれでは嘩嘩の役に立ちますまい。

同じく角と呼ばれても其の成立は一樣ではありません。其の中鹿の角に就いては稍々詳しく述べた通り、出来上つたものは全部骨質ですが、初めは皮膚を被つてゐます。

麒麟の角は其の生々初めは鹿に似てゐますが、鹿の様に中の骨質が出来上るにつれて之を被うてゐる皮膚が剥けるといふやうなことはなく、中の骨が十分出来ても毛のある皮膚が之を被うて一生骨質があらはれるやうなことがありません。

牛の角は麒麟の角の様に中に骨の軸があつて皮膚を被つてゐるわけですがたゞ其の皮膚が蹄又は普通の爪のやうな堅い所謂角質に變化して居つて、之に毛を有してゐません。水牛の角で出来た印やペン軸等は總てこの角質を利用したもので、同じ角細工でも鹿のとは質が全くちがひます。

まだ述べませんが亞弗利加に居る獸で、矢張り蹄をもつ仲間にする犀と

いふ動物は、鼻の上に大きな角が一本だけあります。此の角は牛の角等とちがつて中に骨の軸はなく、全部が角質からなつてゐます。

以上四通りの中最も普通なのは、鹿のに似たものと牛のに似たものであつて、羚羊や羊の角は皆牛の角に似てゐますし、馴鹿や四不像のは鹿の角に似てゐるのであります。

二二 象

陸上に棲む動物中で最も大きなものは象であります。象の類は今てこそ亞弗利加と亞細亞の南部即ち印度、暹羅、其の他スマトラ等にしかゐませんが大昔は色々の象が殆ど地球上の到る所に棲んでゐたものと見えて、方々から其の骨や歯が掘出され、我が國にも嘗ては二三種類の象が棲んでゐたことを語るやうな骨や歯が掘出されてゐます。斯様に一時榮えてゐた象の類も其の



後だん／＼劣るへて、今日では前に述べたやうに暖い地方にのみ棲むやうになり、それでさへ保護を加へぬと兎角滅じようとする傾きがあるやうになつてまゐりました。さて同じく亞細亞に棲むものでも、また亞弗利加に棲むものでも、地方によつて多少の相違がありますけれども、大體くるめて亞細亞にゐるのを印度象といふ、亞弗利加にゐるのを亞弗利加象と呼んでゐます。印度象は亞弗利加象に比べると幾分小さいですが、それでも牡は肩の高さが一丈を越え、體重が八百貫に達するものがあります。頭は中々大きいので中の脳もさぞ大きいだらうと思はれますが、頭骨に大きな空間がありますから、見かけの割合程には大きくありません。頭て目立つものは鼻と象牙であります。鼻は長くのびて其の端に二つの鼻の孔が開いてゐます。象はこの鼻を我々の手のやうに自由に動かし、餌とすべき草や樹の葉や果物等を取るに用ひ、水を呑むにも先づ此の鼻で吸ひ上げて口にそゝぎ込み、水浴をするに

象



も此の鼻から吹きかけるのであります。然し生れたばかりのものは鼻が餘りのびてゐません。その代り口が餘計に尖つてゐて、之を自由に使ふ事が出来ません。象牙は普通の獸の牙のやうに犬歯に當るのではなくて、上顎から生えてゐる二本の門歯の、びたもので、よく發達したものは其の長さ六七尺に及び、重さが十貫に達するものがあります。此の象牙は他の者を攻撃する武器であつて、印度象には主に牡にだけ發達してゐます。たゞセイロン島にすんでゐるものは牝牡共に之を有してゐないのが特徴であります。脚は太くて短く、前脚に五つ後脚に四つの蹄を持つてゐます。そして他の獸では後脚の脛がよく見えぬのが普通ですが、象では人間と同様脛の部分がよく見えてゐます。體が重い上に足が太短いのですから、無論馬や鹿等の様に速く飛ぶわけに行きません。それで急ぐ時には唯だ歩調を早めて歩く位の事ですが、それでも六尺位の溝は難なく跨げることが出来ます、小山を上り

象



下りする事も中々上手で、馬でさへ行きなやみさうな所を、上りならば前脚の膝即ち人間の肘に當る所を折り、下りならば後脚の膝を折つて行くのであります。この脚で出来さうにも見えない泳ぎも可なり上手で、殊に都合のよい事には長い鼻を水面上にのばして、自由に呼吸をすることが出来ます。象は森に棲んでゐますが、性質が臆病で大ていは群を作つてゐます。そして牝や子供等の弱いものはなるべく之を真中に置き、牡が其の周りを守つてゐます。印度では野生の象を柵の中へ追ひ込んで之を飼ひ馴らし、それを家畜のやうにして使つてゐますが、人に飼はれてゐる中に子を産むやうなことはありません。尤も暹羅では飼はれてゐる中に子を産むこともあるさうですが、それが人の役に立つまで育てるには随分日數がかゝりますから、餘り必要なことでもありません。

亞弗利加象は印度象によく似てゐますが、耳が非常に大きいこと、牡牝

共に牙のあること、たけが一層高くて運動が割合に活潑なこと等が主な相違點であります。

一一一 兎狩

諸君は兎狩をしたことがありますか。私は郷里の學校の寄宿舎にゐた時分に毎年之を試みましたが、其の時の愉快は今もなほ忘れることが出来ません。兎狩をするには先づ網が必要で、私共は最初其の網からこしらへてかゝつたもので、各室で勉強の相間々々に細い緒網で網をすいたのですが、すき作らこれてどの位な兎がとれるだらうか等と想像するだけでも楽しみなもので、さて寒い北風の吹く冬になると一同は元氣よく兎狩に出かけるのでした。まづ小山の頂上に例の網を張り、見張りの者が物かげに隠れる等すべての準備がすむと、一同は山の麓に散兵線を作つて相圖の喇叭の聲と共に、突貫の



聲勇ましく追ひ上ります。兎は前脚よりも後脚の方が長い獸ですから、山を
 かけ上ることは最も得意なのです。そこで今突貫の聲を聞きますと、初めの
 中は草木の繁つた所に身をすくめて隠れてゐますが、何分多数の攻撃軍は手
 さびしく攻めたてますので居たまらなくなり、得意の後脚を蹴つて山上の方
 へかけ上ります。既に兎が出たとのことが分れば全軍の勇氣が百倍して愈々
 するどく攻め上りますから、兎は今や夢中にかけて上つてゐますが、頂上に網
 があるとは氣が付きやうがありません。遂に之にからまつて狼狽してゐる所
 を今までかた唾を呑んでまつてゐた見張人に捕へられるのであります。する
 と萬歳の聲が山に響さわたるのでした。

兎狩は中々勇壯な遊びで、ふだんならば到底通れさうもない茨の中でも、
 上れさうもない崖でも此の時ばかりは知らず／＼の間に進むことが出来て、
 振りかへつて見て我が身乍ら驚くやうな事がありました。斯様にして一日狩

り立て、澤山な獲物を携へて寄宿舎に凱旋すると、料理人は早速之を夕食の
 御馳走に上せ、一同は今日の戦功を誇りつゝ舌鼓を鳴すのでした。

翌日先生の指導で、昨日とれた中の二三疋を解剖することになりましたが
 先生から先づ腹を開く前に外から見える次の諸點に就いて、十分注意するや
 うにとの話があつて、黒板に書かれた文字は次の通りでした。

のうでぎ

- 一、毛はどんな色か、此の色が兎にどんな利益があるか。
- 二、體長はどのくらゐあるか。
- 三、前脚と後脚との大きさの割合はどんなか。
- 四、趾は何本づゝあるか。
- 五、尾はどんなか。
- 六、耳の長さをはかれ。

七、眼は頭の割合に大きいか小さいか。
八、口をあけて歯の模様を調べよ。

これ等に就いて調べた結果を各々が帳面に記入しましたが、皆さんも解剖製標本に就いて調べて御覧なさい。それから愈よ解剖して腹を開き、順に胃や腸や肺や心臓を調べましたが、特に驚いたのは腸の非常に長いことです。兎等のやうに木の芽其の他の植物質を食するものは、肉食するものに比べて腸が長いのです。何故にさうであるかといふことに就いては、諸君の方でよく考へて見るがよいでせう。又何でも解剖するやうなことがあつたならば、其の動物の食物と腸の長さをよく考へ合せて見るがよろしい。

兎は昔から色々な話の種になつてゐて、月の世界のあの隈は兎が餅を搗いてゐるのだといふこと等の話は、諸君も皆よく聞かされたこととせうが、もとより一つのお話であります。隠岐つ島の白兎が「わにざめ」をだまして因幡の國に渡ることが出来たが「わにざめ」に毛を食ひ取られて泣いてゐた所を大黒様に救はれたといふ話も有名なものですが、之も一つのお話として聞いて置くがよいでせう。然し因幡國即ち今の鳥取縣等には、冬になると白兎に變る兎がすんでゐます。之を普通の野兎と區別して越後兎と呼んでゐます。越後兎は青森、秋田、山形等の諸縣から、日本海に面する富山、福井、鳥取等の雪の多い地方に棲んでゐて、東海道や山陽道のやうな暖かい地方には冬が來ても白くならない野兎ばかりです。野兎や越後兎の外に飼兎といふのがありますが、之は多くは外國から輸入したもので、其の祖先は外國の野兎であります。

二三 鼠の跋扈

「憎まれ子世にはゝかる」との諺のやうに、人に憎まれながら到る所に

はびこつて、人間に非常な害を興へてゐるものは鼠であります。今假に我が國に人口と同數位即ち六千萬程の鼠が居つて、各が毎月一升の米を食ふとすると、毎年の損害は約一億五千萬圓位になるのであります。

凡そ世の中に鼠程どんなものでも食ふ獸はありますまい。米、麥、豆、甘藷を初めとし、牛肉、魚肉、牛乳、油等皆食し、時々は咯痰をさへ食ふものがあります。けれども其の最も好むものは米又は麥の煎つたもの及び胡麻油のやうな植物性の油で、割合に好かぬものは昆布等の海藻類であります。それから鼠は敢て食ふといふわけではありませんが、大切な衣服や貴重な道具を傷つけたり、又瓦斯鉛管を噛つて火事を起させたことさへあります。若しそれベスト病を傳播する害に至つては、實に恐るべきものであります。

鼠は兎に似た獸で、随分堅いものでも噛りますが、之に就いては兎に似た都合のよい齒を持つてゐます。即ち門齒は上下各二本づゝあつて、其の前面



鼠の跋扈

だけが珞瑯質といふ極めて堅い質からなつてゐます。それ故に此の齒で物を

咬むと後面が餘計にすり減らされて、齒の先が鑿のやうに鋭くなるのであります。なほ耳は小さい音でもよく聞き分け、鼻は遠方のものでよく嗅ぎ分け、眼はよく輝いて物を見分ける力が強いから、猫等の敵が近づいても早くさとることが出來て、安全な所へ逃げ込みます。

鼠は中々惻愴な獸で、一度使つた罠に二度とかゝるやうな事はありません。又目の前に好きな餌があつてもそ



れを其の場で食ふやうな事はなく、必ず安全な所へ持つて行つて食ひます。又好きな油が徳利の中にあるのを嗅ぎつけて、自分の尾を之に挿し込み、其の尾についた油を舐めてゐるのを見た人があります。又卵を持ち去るのに一疋の鼠が之を抱いて仰向きになり、其の仲間が尾を引いて遂に目的の場所まで運んで行つたのを見た人があるさうです。

鼠は時々大群を作つて移住することがあります。我が國でも昔大井川を澤山な鼠が渡つたことがあり、又今から八九十年前即ち天保年間には九州の天草島附近の島で、多くの鼠が島から島へ渡つて作物を非常に荒したことがあります。なほ又今から約二百五十年前即ち延寶七年の春、奥州津輕領の海で鰯がよつて来たかと思つて網を下して見ると、數へ切れぬ澤山の鼠が網々にかゝつて、濱へ引き上げられるや否や、家の中といはず田の中といはず、あらゆるものを傷けて非常な害を與へたことがあります。我が國では昔から鼠



が移住するのは、都の遷される前兆である等といつてゐますが、固より信ずべき事ではありません。南亞米利加の或地方で、約三十年毎に無數の鼠が田畑に出て来て、作物に大害を與へるので其の原因を調べて見ると、此の地方には一種の竹があつて實が出来るのを、この鼠が餌として居たのであつたが此の竹は約三十年毎に枯死する性があるために、鼠が食物を失つて前に述べたやうな害を與へるのであることが分りました。歐洲大戦争で露西亞の都のペトログラードやモスコに鼠が非常に殖えて、糧食が貯へてある倉庫等てひどい害を與へました。そしてあの臆病な鼠が人間の聲や物の音にも恐れないて、日中に出て来て害を與へるやうになりました。或動物學者の研究によりますと、戦地の人間が逃げ出て空家ばかり出来たので鼠も食物がなくなり人に従つて避難したのであらうといふことであります。此等のことから考へて見ると鼠の移住は食物のために起ると見るが正しいとせう。

日本に居る普通の鼠に「くまねずみ」といつて、背が黒色で腹部が灰色のものがありますが、此の鼠は今から約八五十年前、支那の英雄成吉思汗が亞細亞全部を征服した頃中央亞細亞から起つて、支那は勿論歐羅巴や南北亞米利加にはびこつて、今から百二三十年前までは非常な勢で殖えてゐましたが、今は「しちらうねづみ」に征服されて歐洲では殆どなくなり、日本でも東京附近には極めて僅しかゐません。

「しちらうねづみ」は「くまねずみ」より大きくて、脊は茶褐色、腹は灰色であります。此の鼠は今から二百年餘の昔支那の西部から起つて、次第に「くまねずみ」を追ひのけ、今では世界中にはびこつてゐます。我が國へも餘程以前に朝鮮から越前に渡つて、次第に南の方へはびこつて行きました。

東京で最も多い鼠は「えぢぶとねずみ」といつて、もとエヂプトに起つたもので、「くまねずみ」に似てゐますが、脊は大體黄褐色で脊筋の所だけ黒く

腹は灰白色であります。

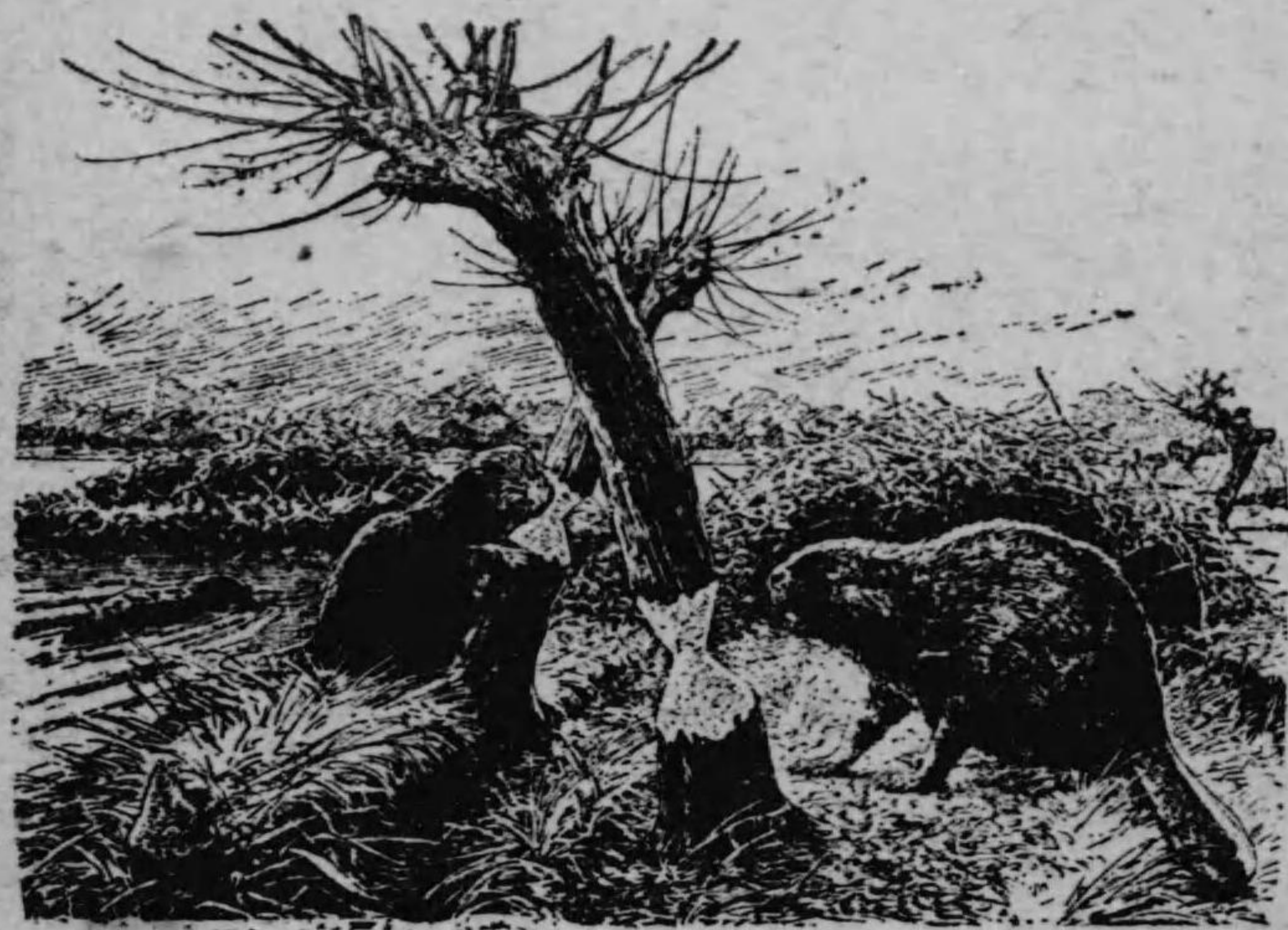
さて鼠が跋扈するのは前にも述べたやうに鼠はどんなものでも食物にすることや、敏捷なことや、割合に惻愴なこと等にもよませうが、子孫の殖えることが多いといふことが一番の原因で、或人の計算によると雌雄一對の鼠から出来る子孫は四年目に百七十六萬三千となるさうであります。

二四 建築家の海狸

北亞米利加には大工や左官に弟子入りもせず、又工業學校を卒業せずして生れ乍ら人を驚かすやうな工事を營むことの出来る獸が居ります。此の獸は常に水邊に棲むので海狸と呼ばれてゐますが、實は狸の仲間ではなくて、寧ろ兎や鼠に似た種類であります。其の體長は二尺五寸から三尺まで位で、水に入る獸に普通な軟い毛が密生し、平くて幅の廣い尾には毛がなくて、皮

膚が鱗のやうになつてゐます。水の中で浮いたり沈んだりする時に此の尾を上下に動かし舵のやうな働きをさせ、又之で地を叩いて仲間に危険を知らせることがあります。なほ後脚の趾の間には蹼があつて泳ぐに都合よく、耳は小さくて外に疊めますから、水中で耳の孔を塞ぐことが出来ます。

海狸は自分の巢を木材と泥とで作りますが、木材を得るには鼠のに似た門歯で立樹の幹を嚙り取るのであります。此の時幹の一面を他面より高く嚙つて前以て幹の倒れる方向を見定めて置きますから、直径一尺位な木を倒すことがあつても、其の下に壓へつけられるやうな事はありません。さて倒れた木は之を三尺から一間位の手頃の材木として、或は口にくはへ、或は前足で攪み、或は胸で押し、或は地に轉がして巢に運びますが、時には巢に達するやうな水道を作つて、水の流を利用してすることがあります。巢には穴があつて一方は食物をあさる森林へ通じ、他の一方は狼や熊等に攻撃されても大丈夫



海 狸

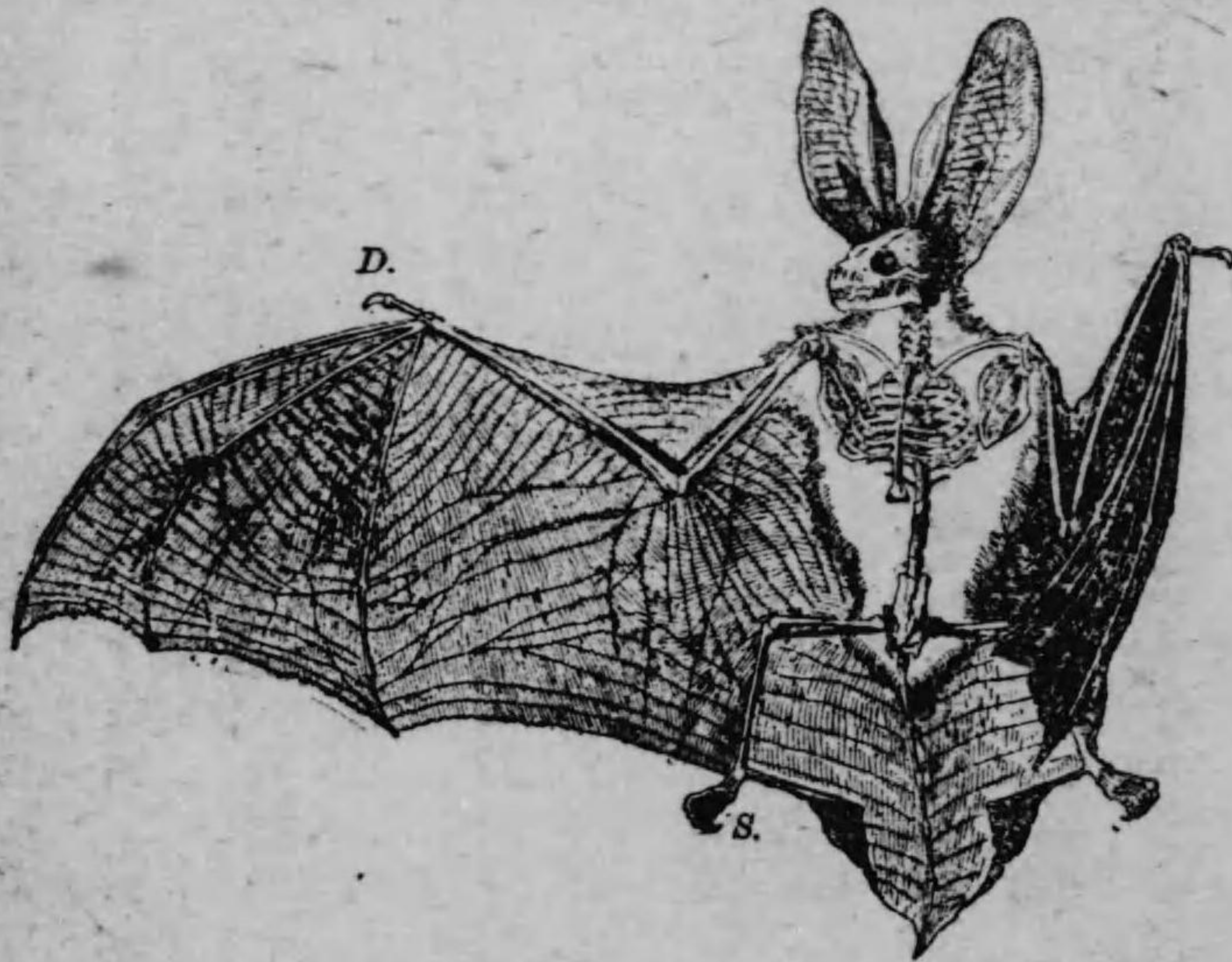
夫の様に、水中に開いて安全な逃げ道となつてゐます。斯様な譯で逃げ道に當る穴の口までは常に水が来てゐる必要がありまますから、態と大きな堤防を築いて水を湛へさすることがあります。堤防は矢張り木材と泥とで作り、出来上つたものは長さが二十間幅が二三間、高さが一間に餘るものがあります。無論巢といひ堤防といひ之が工事には大勢力を合せて當るのであつて、此の際別に見張ものがあつて、敵でも來ると例の尾を叩いて仲間に告げるのであります。



海狸の食物は若い木や木の皮等で、秋になるとよく働いて冬の貯へをいたします。なほ堤防が凍えて裂目が出来ないやうに、新しい泥で上塗りをいたします。なほ此の獸を動物園に飼つて置いても、材木を與へると之を嚙んで手頃の大さに揃へる所を見ると、此の獸は何所に居つても工事をするやうに産れつゝいてゐるのでせう。けれども歐洲や西比利亞等にゐる種類は多く水邊の穴に棲んで、特に工事を起すやうなことは殆どありません。

二五 飛行家の蝙蝠

一或所で獸類と鳥類との戦争が初まつたところが、蝙蝠は獸の方からも鳥の方からも味方になつてくれるやうに頼まれた。蝙蝠は横着にも、戦の旗色を見て強い方につかうとしたので、獸類にも鳥類にも憎まれるやうになつてどちらの仲間にも入れられず、たゞ夜だけこそくゝと出るに過ぎない身となつた。とはよく聞かされる話で、諸君もさぞ知つてゐることせう。思ふに此の話は蝙蝠の身體を見れば獸のやうであるにもかゝらず、鳥のやうに翼があつて空を飛ぶことが出来る所から考へ出した作り話でせう。然し蝙蝠はいふまでもなく立派な獸であつて、空を飛ぶといふ事の外に鳥と似た所は殆どありません。



飛行家の蝙蝠

りも う か ぎ さ う

我が國にすむ蝙蝠にも色々種類がありますが、其中臺灣と琉球とを除けては何處にてもゐるもの

即ち兎蝙蝠といふ耳の長い種類に就いて述べて見ませう。何といつても一生の大部分を空中で過し、乳呑兒を胸に著けたまゝ、飛び去る餌を追ひかけることが出来る獣ですから、色々の點が空中生活に適するやうになつてゐるのであります。

先づ前脚から後脚及び尾にわたつて、薄い皮の膜が張つてゐます。そして蝙蝠傘にも骨があるやうに此の膜にも支へとなる骨がありますが、その骨は皆掌の骨や指の骨が細長くのびたものであります。後脚の趾はどれも膜の中に閉ぢ込められてゐません。然し踵の所から拍車のやうに突き出てゐる骨があつて、この骨と尾との間に膜が張つてゐます。此の骨は他の獸では見る事の出来ない蝙蝠特有の骨で、拍車骨と名づけられてゐます。なほ目と鼻との間から出る一種の油を膜に塗つて、翼の弾力を失はぬやうにとめてゐます。

肩の骨や胸の骨は前脚を餘り使はぬ普通の獸では左程發達してゐませんが人間や猿のやうに前脚即ち腕や手をよく使ふものは是等の骨がよく發達してゐます。殊に蝙蝠のやうに手即ち翼の運動の大切なものでは、腕の骨の支へとなるべき肩の骨は非常によく發達し、なほ胸の骨もよく發達して、腕を動かすに必要な筋肉は皆この肩や胸の骨に着くのであります。其の他身長の短いことや腸の短いこと等の特徴があつて、なるべく體を軽くするやうになつてゐますが、然し飛ぶことにかけては本職の鳥にはとてもかなひません。蝙蝠が歩くには先づ前脚の拇指の爪を物に引つけて、後脚を體の方に引き寄せ、次に後脚の趾の爪を物に引つけて、後退りせぬやうにして體をのばすと即ち一步進んだことになるのであります。又休息時には後脚の趾を木の枝に引つけて、頭を下にしてさがつてゐます。これは敵に襲はれて急に逃げるのに都合のよい姿勢で、たゞ翼を擴げて墜ちさへすればよいのであり

ます。

この動物は日中は眠つて、夜になると出て蚊や蠅や甲蟲や蛾等を捕へて食ふのですが、是等の餌をさがすには眼よりも寧ろ翼と耳とによるのであります。或人が多くの網を引渡した室内へ目を隠した蝙蝠を放ちました所が、彼は自分が動かす翼のために起る空氣の波動によつて、網のある所が分るかのやうに、少しもこれに衝突することがありませんでした。耳は我々の到底聞き取ることの出来ない音でも聞き取ることが出来て、あの大きな耳殻を音の来る方向に自由に動かしますが、その代り騒しい音には堪え切れないと見えてそんな時には耳殻についてゐる小さい突起で、耳の孔を塞ぐやうになつてゐます。

餌を求めるには飛び乍ら口を開いて捕へるか、或は後脚と尾の間に張つてゐる膜を以て捕へるのであります。膜で捕へる時には尾を餌の方へ曲げると同時に、趾を腹の方へ曲げて全く蛾取網を作るのであります。齒は其の先が針の様に鋭くて、甲蟲等でも一旦捕へられると逃げる事が出来ません。腸は動物性の食物をとるものゝ常として、前にも述べたやうに極めて短いのであります。

鳥の中には餌にする昆虫が居なくなると暖い國の方へ去つてしまふものがあります。左程強くもない翼を持つ蝙蝠はとてもそんな真似が出来ません。それで冬になると洞又は枯木等に群を作つてかゝり、硬くなつて所謂冬眠するのであります。此の間は體温も平素の三十五度位から十五度位に下り脈搏も三秒に一回、呼吸も殆ど認め難いやうになります。密生してゐるばかりでなく、各に木賊のやうな節があつて、體温が散らぬ様になつてゐます。冬眠中は無論食物を取りませんが、前以て身體の中に貯へて置いた脂肪が食物の代りとなつて働くのであります。けれども此の脂肪にも限りがあります。

から、冬の永い所、即ち昆蟲の早くあらはれないやうな所はこの動物の生活に適しないのであります。それ故に餘り寒い地方には居りません。初め上げた昔話のやうなものがあつたためてせうか、蝙蝠を悪い獸のやうに思つてゐる人がありますけれども、色々の害蟲を食つてくれますから、寧ろ有益動物といふべきであります。獨逸の或地方で古い櫛の木を伐り倒したところがあつましたが、其の木の洞に冬眠をしてゐた何千といふ蝙蝠は遂に凍えて死んでしまひました。然るにこれまで此の獸のために殺されて居た毛蟲が俄に増したので、翌年は其の地方の櫛の木はいふまでもなく、これに似た多くの木が非常な損害を受けたことがあります。梟、鼯、猫等は蝙蝠に取つて恐るべき敵であります。

二六 地をもぐる鼯鼠

獸類は大てい陸上にすむのが普通ですけれども、既にお話した獸の中にも水を泳ぐ鯨や空を飛ぶ蝙蝠のやうに特別なものがありました。諸君はなほ此の外に地をもぐる鼯鼠といふ獸のあることを知つてゐるでせう。鯨や蝙蝠がそれ／＼泳ぐことや飛ぶ事に適した構造をもつてゐるやうに、鼯鼠は地をもぐるに適した構造をしてゐるのであります。

鼯鼠は體長が六寸位で、圓い柱のやうな體をしてゐます。若し體が太いか或は一部分だけでも太い所があるならば、土中を進むのに必ず太い隧道を掘らなければならぬわけで、それだけ力を其の方に餘計に費すことになるのであります。

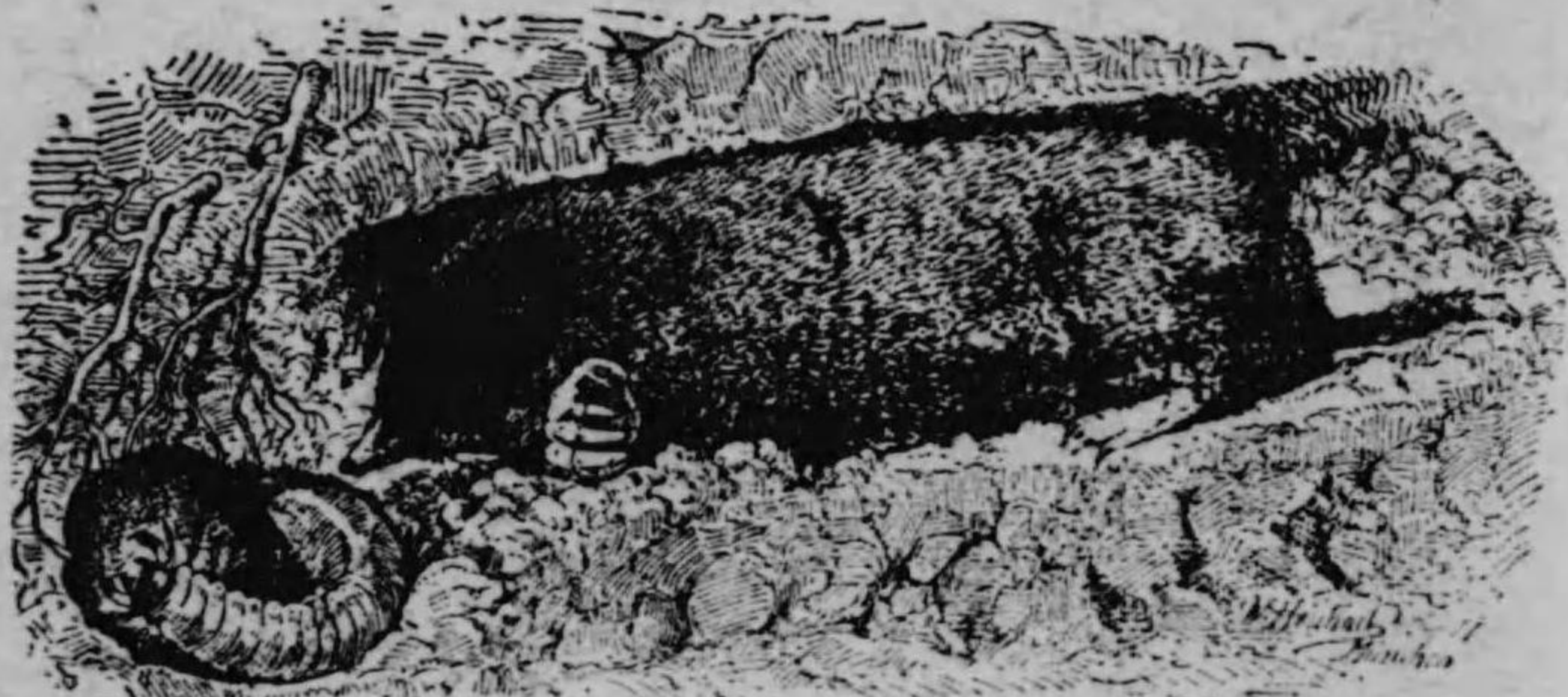
次に毛皮は天鵞絨のやうに軟で、絹も及ばぬ滑な細い毛が密生してゐます。鼯鼠は此の毛皮をもつてゐる爲に體温を散すことなく、又濕氣を通すやうなことがありません。なほ土中を進む時に周りの土と體とが摩擦するこ

とが少くて、而も泥が附かないのみならず、行きつまつて退却をしなければならぬ時に、剛い毛が後向きに生えてゐる普通の獸に比べると、極めて樂に後退りが出来るのであります。地中其の他日蔭にすむ動物は大てい淡い色をしてゐますが、この獸は黒褐色の毛色をしてゐます。この色は夜地面に出て蚯蚓等を捕へる時に、他目を引きませんから都合がよろしい。

頭では口吻の所が尖つて剛い毛が疎に生え、鼻が多少延びて弾力がありますから、餘り堅くない土地ならば頭を前後に動かすだけでも、相當に道を開いて行くことが出来ます。口は小さくて鼻の下にありますが、齒を見ればこの動物が明かに肉食することが分ります。即ち白齒の表面に圓錐狀の突起があつて、くはへた蚯蚓や根切蟲や蛞蝓等が容易に逃げることの出来ぬやうになつてゐます。眼は僅に形があるだけで物を見ることは出来ません。つまり日光の通らぬ土中にゐるのですから、其の必要がないのであります。耳は耳

殻がないけれども非常によく聞えます。それに物を嗅ぎ分ける力も強いですから、盲目でも餌を求めるに何の不自由もありません。前脚は恰度土方が土を掘る時に用ひるシヨベルのやうな形をしてゐます。それに普通の獸では脚は皆體から下へ出てゐますけれども

地をもぐる鼯鼠



鼯鼠では全く横の方へ出て、その廣い掌が後方を向いて各の指には鋭い爪があります。我々が匙を以て物をかくやうに鼯鼠は此の手で土をかき分けるのですが、我々は堅いものをかく時にはなるべく匙の柄を短く握る方がよく力が入ると同様に、絶えず堅い土をかき分けてゐる鼯鼠の匙の柄即ち腕は、非常に短くて

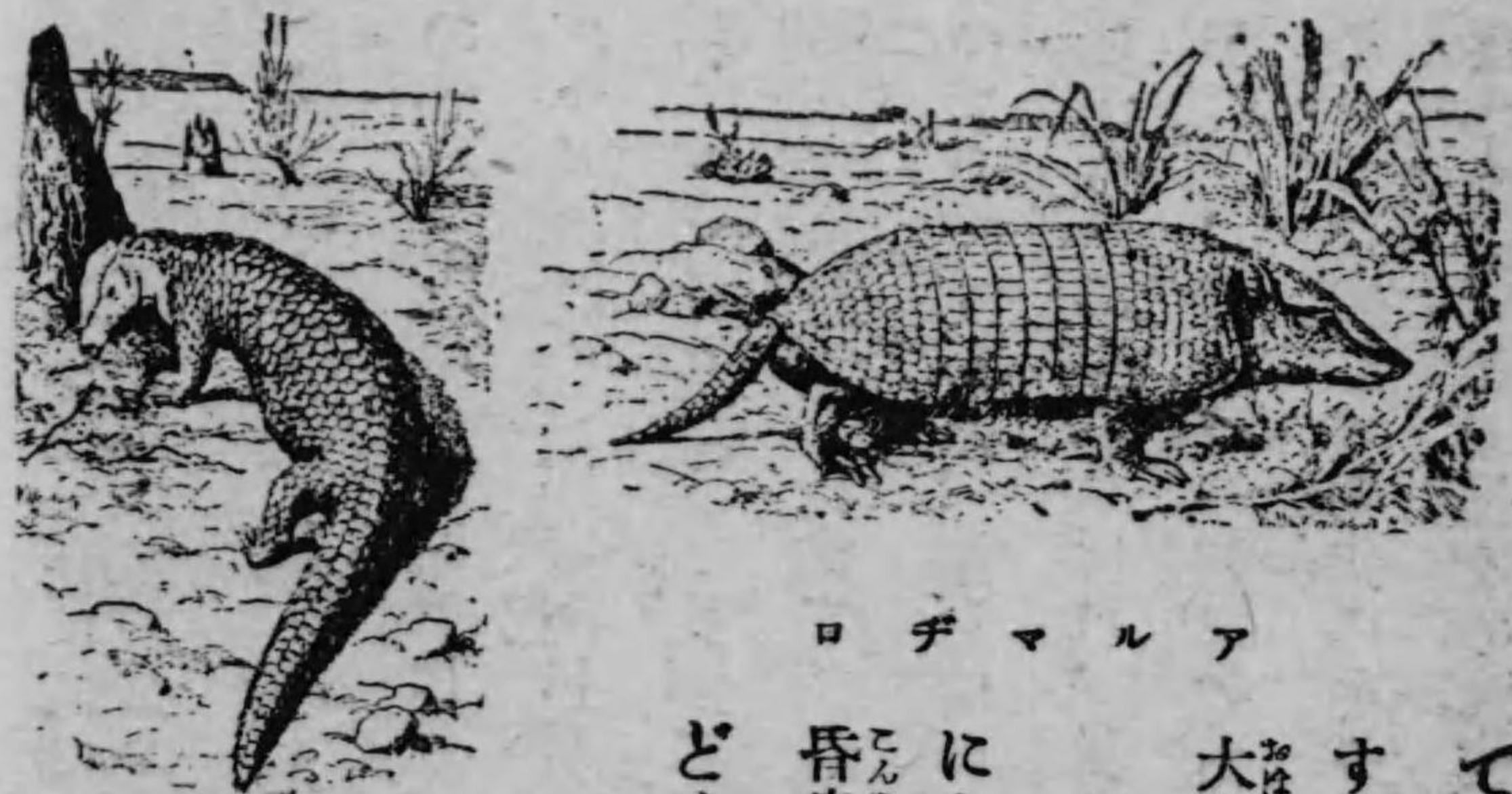
殆ど體の中にかくれてゐます。而も肩の骨や手を動かす筋肉は非常によく發達してゐるのであります。後脚は非常に小さくて、たゞ歩くだけの役に立つばかりです。尾も細くて短いです。割合に長い毛が生えてゐます。

鼯鼠は土中に橢圓形の巢を作つて、其の中に枯草等を敷いて濕氣を防ぎ、下に隧道をつけてゐます。なほ池又は井戸へも隧道をつけて飲水を得易いやうにし、時には巢の内に小さい井戸を設けて、之に飲水を貯へてゐるものがあるさうです。

鼯鼠は毎日土方のやうな仕事をしてゐるので、随分お腹がすくと見えて、毎日自分の體重に勝る位な食物をとるのであります。其の餌となるものは大てい有害な小動物である上に、堅い土を砕いてくれますから、其の點からいへば人間の爲になるやうですが、植物を害し堤防を壞すやうな害を與へることも少くありません。

二七 鱗を被つてゐる獸

鱗といへば魚を思ひ出す位なものであるのに、獸の中に之を被つてゐるものがあるといへば諸君は驚くかも知れません。けれども南亞米利加に棲む「アルマジロ」や我が臺灣に居る穿山甲は立派な鱗を持つてゐるのであります。「アルマジロ」は體長が二尺位あつて、身體一面に骨質から出來た茶褐色の堅い鱗を被つてゐます。そして背の方にあるものは横にならんで幾列にもなつてゐますから、體を曲げるには何の妨げにもなりません。なほ鱗と鱗との間からは毛があらはれ、殊に腹側には澤山な毛が生えてゐます。頭では口吻が尖り、齒は頗る簡單であります。詳しくいふと普通の獸の齒のやうに根がなく、何れも皆釘のやうな格好で、之が三十六本ばかり生えてゐます。舌は細くて可なり長くのばす事が出來ます。眼は小さくて物を見る力は弱い方



穿山甲

ア
 ですが、耳は大きくて鼻と共に非常に鋭敏であります。脚といひ尾といひ石龜のによく似て、爪は中々大きくて鋭い方でありませす。

此の獸は地中に穴を掘つて巢を作り、晝間はそこにかくれてゐますが、夜になると出て来て、蚯蚓や昏蟲や蛇や蜥蜴を捕へて食ふのですが、馬の死肉なども喜んで食ひ、なほ適當な餌がなければ野菜のやうなものでも食ひます。若し敵に逢ふと體を巻き縮めて球のやうになります。かうなると鱗が堅いてすから、さすがの敵も之には手のつけやうがありません。人が捕へると噛みつくやうな事はないですが、爪で引つかく

ことがあります。

此の獸の肉は脂肪が多くて、食用としても豚の肉より味がよいさうです。又其の脊の皮は鱗のついたまゝ、皿に作り、尾と口とをつなぎ合せてその下手としてあるのを見た事があります。

穿山甲は「アルマジロ」と縁の近い獸で、身體一面に鱗があつて、瓦を葺いたやうに並んでゐます。然し其の鱗は「アルマジロ」のやうな堅い骨質ではなくて、多くの毛が平に密着して出来たものであることがよく分ります。尾は胴と同じやうに鱗を被つてゐる上に、其の根もとが太いですから、外から見て胴との境がよくわかりません。それ故に「アルマジロ」が龜に似てゐるとすれば、穿山甲は蜥蜴に似てゐるといつた方が適當でせう。

性質が至つて臆病で、敵にあふと體をまるめて鱗を逆立て、防ぎ、蟻や白蟻を見ると長い舌を出して捕へて食ふのであります。

二八 カンガル

私はもとずつと南にあるオーストラリアの野原に躍びまはつてゐたカンガルといふ獣ですが、赤道を北へ越して日本の國へ參つて見ますと、見もの聞くもの皆珍しいものばかりであります。所が日本人から見ると私のなりやする事が餘程變つてゐると見えて、此の動物園に来る見物の人達は何を見のがしても、私だけは是非見て歸るといふ有様で、柵の前が何時も繁昌してゐます。見物人の話しあつてゐることを聞いたり、またお隣の兎君や鹿君を見ると、私自身にも私の身體の特別な點について氣が附かね事もありません。

先づ第一に變つてゐることとして珍しがられてゐる事は、後脚と尾とが非常に大きいこと、雌のお腹に袋がついてゐることであり、隣の兎君の脚



カンガル

カ ン ガ ル

も後の方が大きいやうですが私の後脚は前脚に比べて非常に大きくて、其の違ひはとも兎君のとは比べものになりません。そして前脚には普通の指が五本あつて、食物を擡んで自由に口へ持つて行くことが出来ますが、後脚では第四の趾其爪が目立つて大きくあとは其半分もありません。殊に第一の趾は全くないのであります。諸君は私が走る所

を御覧になつた事がありますか。それは外のものと餘程違つてゐますから、來る人は皆珍しさうに見てゐます。人間でも戦争等で脚を一本失つた人はよく松葉杖をついて歩いてゐませう。私の歩き方はあれによく似てゐます。即ち前脚を杖のやうにちよつとついで、後脚を蹴つて前へとぶのであります。普通の歩き方では一飛が三尺位ですけれども、犬等に追はれた時は一丈位を一飛にして、二三時間もつゞけ様に走ることが出来ます。そして走つてゐる途中に後脚で立ちあがつて、危険がないかと四方を眺めることがあります。其の時には後へ倒れぬ様に此の太い大きな尾を地に突張つて、支へにするのであります。こんな具合ですから、坂にかゝると走るにしても立ち上るにしても、平均がとれにくくて困りますので、逃げる時等は殊に坂を避けるのであります。私はよく泳ぐことが出来ますから、敵に追はれるとわざと水の中へ逃げ込んで、反對に敵を水の中に沈める事もあります。尤も陸に居る時でも愈

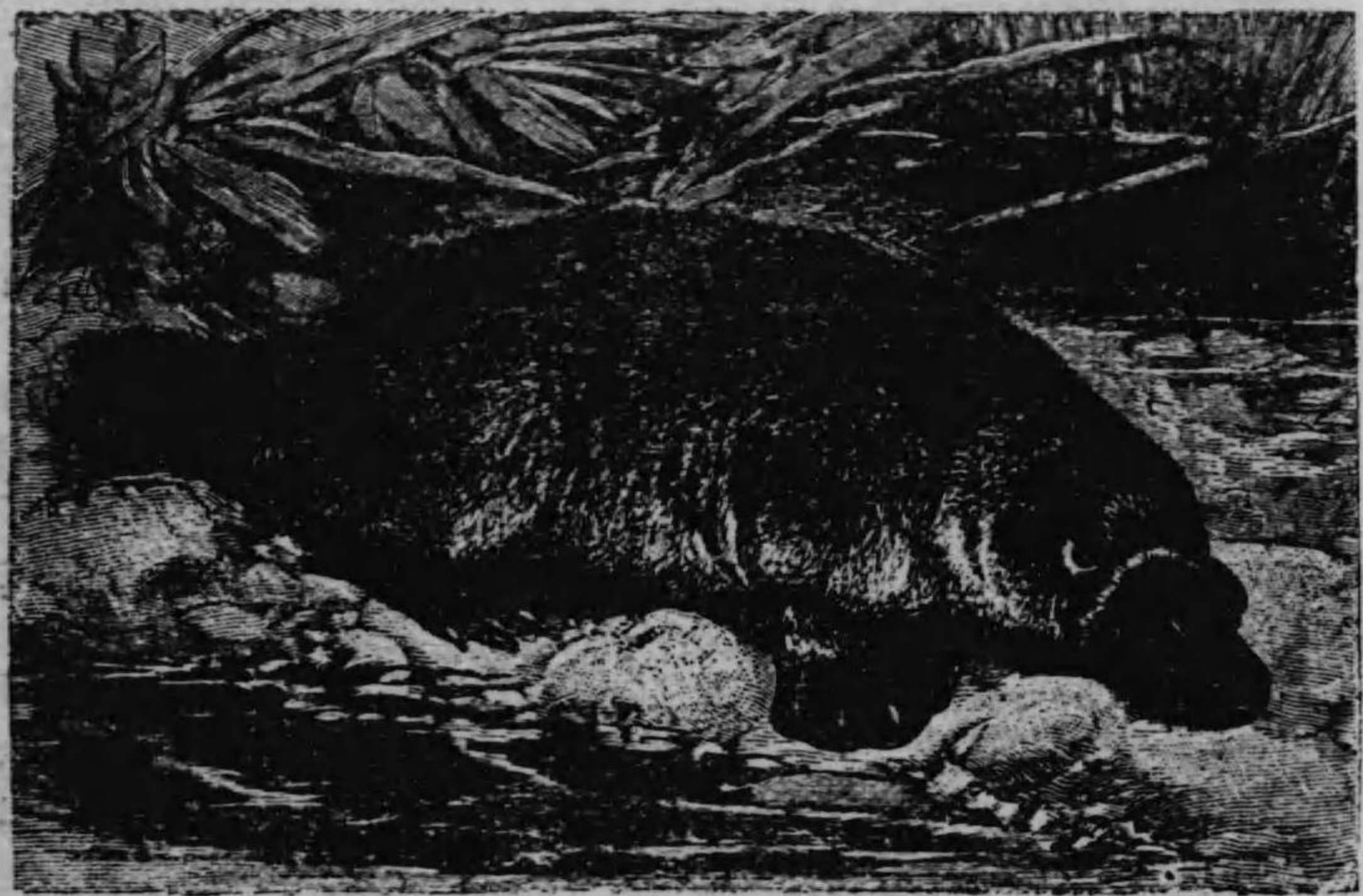
々となれば、此の後脚にある大きな爪で敵の腹を打ち破るつもりであります。私共は一回に一疋の子を生みますが、生れた子は非常に小さくて、先づ人間の拇指位な大きです。無論眼も見えず毛もありませんし、四脚も皆同じ長さであります。それで生れると直ぐ母親は之をお腹についてゐる袋の中へ入れてやるのです。これが皆さんに取つて珍らしいのは勿論ですが、恐らくは獸の仲間でもさぞ不思議に思つてゐる事とせう。けれども私の本國オーストラリアに行けば、お腹に袋を持つてゐる獸は外に幾らも居るのであります。さて子供は袋の中で乳を飲み乍ら次第に生長して、三ヶ月もたてば兎の子位の大きさになつて袋の外へ顔を出すやうになり、六ヶ月もたてば袋から出て歩きまはり、軟い植物の葉等をたべるやうになります。物に驚かされると直ぐ袋の中へ飛び込みます。これが餘程可笑しいと見えて、見物の人達はよく笑つてゐます。

私は今でこそ此の動物園で麵麩や野菜をいたゞいてゐますが、本國の野に居る時には草の葉等を食べてゐました。それで臼齒が非常によく發達してゐます。然し牧場等へ人間の作つてゐる牧草を盗みに行つたこともありすが私の下顎の門齒が少し出齒になつてゐるので、草の根にまで害を能へるさうて、牧場の主人からはひどく嫌はれたものです。それで私の仲間では人間に狩り立てられて命を失つたものも少くありません。

二九 卵を産む獸

オーストラリアにはカンガルーの様に腹に袋を持つてゐる獸が居ることは前に述べましたが、なほ其の外に鴨嘴獸や「はりもぐら」の様に、獸でありながら卵を産むといふ珍しいものが棲んでゐます。

歐羅巴の或學者は今から百二十年程前に、既にオーストラリアに行つて、



卵を産む獸

か も の し

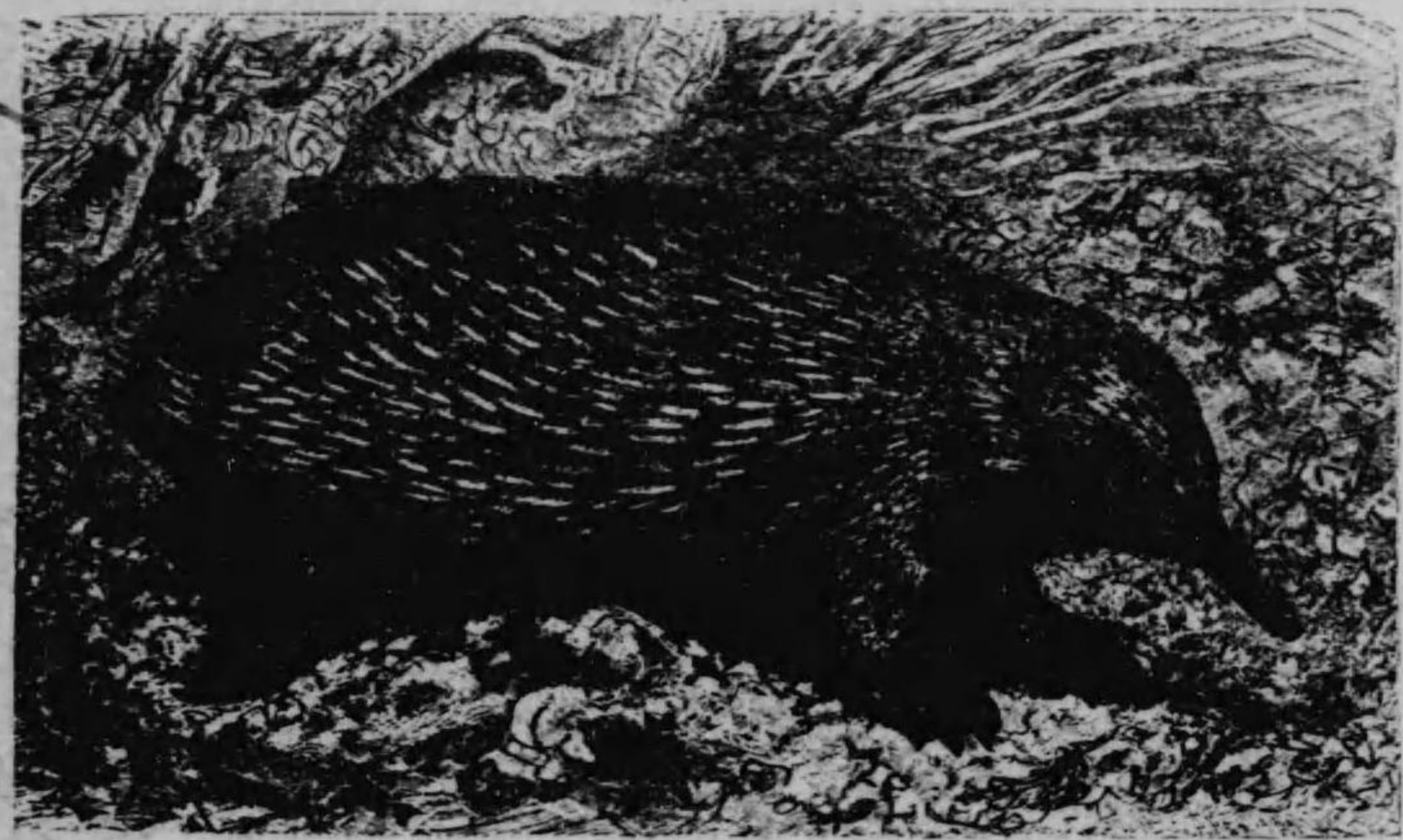
鴨嘴獸が河の堤に卵を産んでゐるのを發見して、之を世間に傳へましたけれども、其の頃の學者は誰一人として之を本當にすものはありませんでした。そして愈々之に間違がないといふ事が確められたのは、それから二十四五年もたつてからの事でした。

此の獸の卵は殻が白いけれども軟かく、大さは雀の卵位で、一度に三四個づゝ産れるのであります。母親が鳥と同じ様に之を抱いて温めます

と子供が解出て來ますが、初めは眼も見えず毛も生えてゐません。そこで母親はカンガルと同様之を腹にある袋の中へ入れ、乳を飲ませて育てるのであります。

鴨嘴獸は卵を産む點に於て鳥に似てゐるのみならず、形に於ても鳥に似た所があります。即ち名の通りに鴨によく似た嘴を持つてゐて、鴨と同じ様に泥の中にある少動物を捕つて食ふのであります。四脚は短いけれども丈夫で五本の趾の間には蹼がありますから泳ぐにも都合がよろしい。又趾には鋭い爪がありますから穴を掘るのも上手であります。なほ後脚の踵には距があつて、蛇の毒に似た毒液を出して敵を防ぐのに用ひます。體は稍々卵形で短い毛が密生し、暗褐色で鼯鼠の毛皮によく似てゐます。尾は平くて海狸の尾のやうに水泳中は舵の用をしますのであります。

巢は大い湖又は河の岸に穴を穿つて作り、草を集めて敷物としてゐま



卵を産む獸

は り も ぐ ら

す。晝はこゝに眠つてゐて、夜になると出て來て活動するのであります。けれども至つて臆病ですから、物に驚くと直ぐ水中に匿れるか又は巢に逃げ込むのであります。其の巢の如きも一方は森の中へ他の一方は水の中へ通ずるやうに道がつけてあります。要するに此の獸は鼯鼠と海狸と鴨とを合せて作つたやうな形をしてゐますが、無論其のすることも亦三つの動物に似た所があります。

「はりもぐら」は身體一面に針のやうな剛い毛があつて、敵にあふと體を卷縮め

て栗の毬のやうになつてしまひますから、手のつけやうがありません。口は嘴のやうに尖つてゐて、長い舌を持つてゐます。そして舌の先に棘がありますから、之を蟻や白蟻の巢に挿込んで餌を舌の先につけるのであります。脚には鋭い爪がありますから、危険が分るとすぐ穴を掘つて身をかくすことが出来ます。此の獸の産む卵も小さくて、而も一回に一個しか生みません。母親は卵が産れるや否や直に之を腹の袋に入れて、此の中で温めて之を孵らせつゝいて乳を與へて育て、行くのであります。

三〇 巧妙な飛行機

近頃飛行機が発達して、鳥も及ばぬ巧妙な飛行振りを見せるといはれてゐますが、然し何といつても鳥は生れながらの飛行機で又飛行家ですもの、身體の何處を見ても空中飛行に都合よくなつてゐて、まだく飛行機のとてても叶

はぬ所が澤山あります。現に飛行機も鳥の身體に真似て作られた部分が少くありません。そこで私は鳥の身體で飛行に都合がよいと思はれる主な點をあげて見ませう。

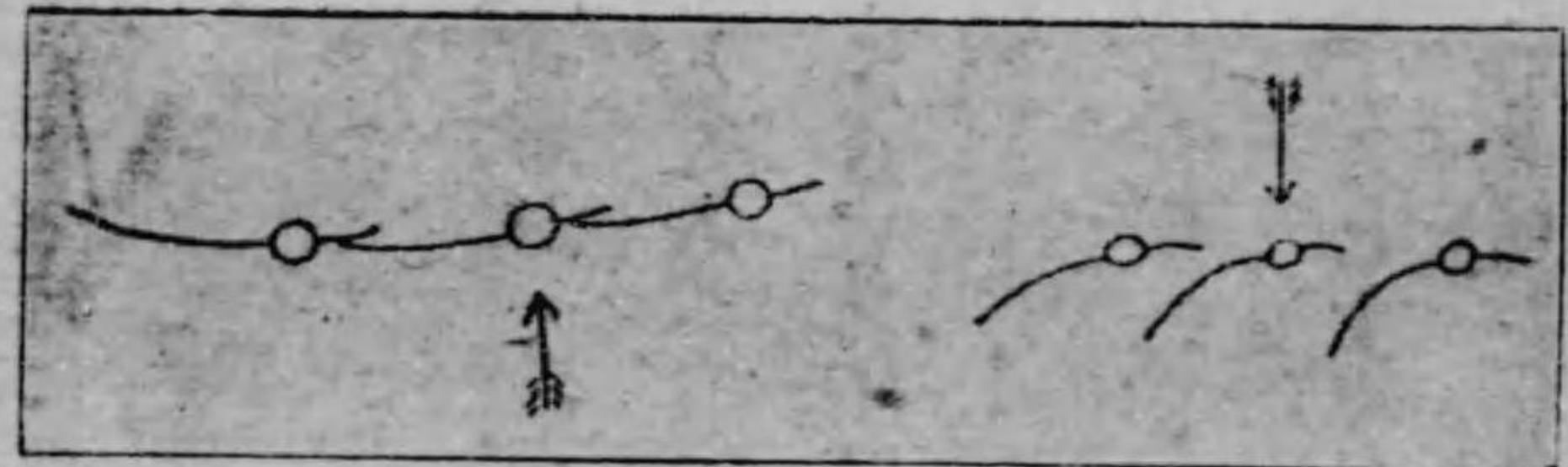
一、身體が紡錘形であること。

水の中を進むには魚形即ち紡錘形が一番水の抵抗を受けることが少いことは既に海獸の所で述べました。ところが空中を進むにも矢張り此の形が空氣の抵抗を受けることが少いのですから、鳥類は大いに紡錘形をしてゐるのであります。

二、翼を持つてゐること。

鳥といへば翼、翼といへば飛ぶことを想ひ出す程で、鳥もこれがなければどうしても飛ぶことが出来ません。鳥の翼は獸の前脚に當ることは、其の内部の骨を調べて見るとすぐ分りますが、外から見た所では羽が幾枚も並んで

生えてゐますから、とてもさうとは思へない位であります。翼に生えてゐる羽は其の軸が一方に偏つてゐますから、翼を搏ち下す時には空氣の抵抗によつて、圖に示すやうに多くの羽が一枚の板の様になるのであります。かうなると翼に受ける空氣の抵抗が益々強くなりやすから體を空中に浮かすのに都合がよいのであります。然し若し翼の上に搏ち返す時に、この



翼を上下するには非常な力が要ります。即ち鳥を料理する時

三、翼を動かす筋肉が発達してゐること。

にもすぐ目につく通り、胸の所に翼を搏ち下す働きをする大胸筋と、翼を搏ち返す働きをする小胸筋とが附いてゐます。大胸筋の如きは全體の重さの五分の一にも當る大きな筋肉ですから、人や獸のやうな胸の骨はとても此の大きな筋肉が付き切りません。それで鳥の胸の骨はこの大きな筋肉をつける爲に特に突き出てゐるのであります。

四、胸の骨格が固くて動かぬこと。

人間等では背骨を前後左右に曲げることが出来るし、又肋骨も上下に動かすことが出来ますが、鳥では是等の骨が固く着き合つて、恰度籠のやうになつてゐて動きません。これが若し曲つたりぐらゝ動いたりするやうなことがあれば、飛行に都合の悪いことはいふまでもありません。特に胸の骨は翼の基礎となるのですから、しつかりしてゐることが殊に必要なのであります。

五、身體の大きさに比べて目方が少いこと。

どんな立派な翼があるにしても、なるべく身體の軽い方が飛行に都合がよいことは、これまたいふまでもありません。それで鳥の體は何處を見ても、差支のない限り軽くするやうに出来てゐるやうに思はれます。例へば骨は細くて中が空になり、なほ體の内には空氣囊が所々にあつて、肺からつゞいて空氣を満してゐます。又大腸が短く、膀胱がありませんから、糞や尿が體内に溜るやうなことがないのであります。

三二 鳥類の王

獅子が獸類の王ならば、鷲は確に鳥類の王であります、其の風采を見るだけでも既に猛々しいことが分りますが、實際鷲程男らしくて勇ましい強い鳥はありません。ですから方々の國て之を國旗の紋章等に象り、現に露西亞も獨逸も勳章の中に鷲をあらはしてゐます。又鉛筆やミルクの印にもよく鷲を用



ひて、其の強いことにあやからうとしてゐます。

まづ鷲の眼を御覽なさい。大きくて窪み、而も金色の光を放つて如何にも恐ろしさうですが、飛び乍ら生きものを狙つて之を捕へようとするのですから、此の眼でないと間にあひません。嘴も大きくて強く、上嘴の方が鈎のやうに曲つて肉を引裂くの都合がよろしい。脚は短いけれども太く丈夫で羽毛を被つてゐます。爪は中々鋭くて鈎のやうに曲り、兎等を捕へるのに適した武器であります。翼は大きくて強く、之を羽搏つて空に上るのを見ると、颯々の聲が響いて如何にも雄々しいのであります。そして一時間に十六里位は飛ぶ事が出来るさうです。

鷲は常に深山に棲んで、高い岩の崖等に樹の枝を組み合せて巢を作ります。其の巢は中々丈夫で八九貫の重さを受けても壊れません。野兎は勿論小羊や羚羊のやうなものまでも捕つて食ひますから、よく話にあるやうに子供

を捕へて行く位は平気でせう。此の鳥は長生きする鳥で百年に達するものがあります。我が國では北海道に多いですが、時々内地に来ることがあります。以上は鷲の中でも「いぬわし」といふ種類に就いて述べたのですが、此の外に「おほわし」といふのがあります。色や形は「いぬわし」に似てゐますが、嘴は一層大きくて、脚の羽毛は、趾の先までには及んでゐません。夏は北海道邊で卵をうみ、冬になると内地にあらはれ、海邊にすんで魚を捕つて食ひます。

なほ本州に多い鷲の仲間に「くまだか」といふのがあります。少し小さくて股と腹とに横線があり、なほ趾にも羽毛が生えてゐるから鷹と區別するところが出るのであります。

凡て鷲のやうに他の動物を捕つて食ひ、性質が荒くて嘴と爪とが鉤形に曲り、大きな翼を持つて飛ぶ事の早いものを猛禽類といひます。獸でいへば





恰度猛獸に相當するもので、此の中には鷲の外に鷹や梟の仲間があります。

三二 鷹狩

今てこそ秋になると多くの人が銃を肩にして獵に出かけますが、昔は銃獵が餘り盛てはありませんでした。其の代り鷹狩といつて、鷹を使つて他の鳥を捕へる遊びが、日本でも西洋でも身分ある人の間に盛に行はれました。それで徳川將軍の如きは鷹狩の爲に多くの役人を置き、江戸の周り五里四方位は御留場といつて平素は獵を禁じて置いて、そこで屢々鷹狩を催したのであります。諸國の大名も亦鷹匠といふ上手な鷹使に扶持を與へて置いたもので、今でも方々に鷹匠町といふのが残つてゐる位であります。

鷹には色々種類がありますが、鷹狩に使はれたものは「おぼたか」、隼、「はいたか」、雀鷹等で、それ／＼特徴によつて使ひ途も違つてゐます。其の



中隼は最も目覺しい「揚げ鷹」といふ獵法に使はれました。これは全く此の鳥のすばしくて勇悍な性質を利用したのであります。それで例へば或所に雁が下りてゐることがわかると、直に鷹匠は隼を放ちます。隼は勇しく大空にかけ上つて、鷹匠の振る采配を見つめ乍ら鷹匠の進む方向に進んで行きます。鷹匠は雁に近より、時を見て犬に雁を追ひ立たせると、隼は矢よりも早く飛び下つて獲物を蹴落すのであります。尤もかやうに目覺しい業を隼にさせるには、其の育て方に一通りならぬ苦心が在るのであります。即ち雛の時から采配の先に餌をつけて之を與へ、常に采配にさへついて行けば、屹度餌にありつくといふことを十分承知させて置かなければなりません。なほ鶴のやうな大きなものを攻撃させるには、最初一羽を放つて其の頸を傷けさせ、次に又一羽を放つて腋の下を傷けさせるのであります。

「はいたか」は驚や鶉のやうな葭の中に居る鳥を捕るに用ひられ、時として



は鴨獵にも使はれました。鴨のやうに池や沼に居るものを攻撃させるには、鷹の脚へ紐をつけて置いて餘り遠くへ行かぬやうにして置くのであります。其の他雀鷹の雌即ち「つみ」は鶉等を捕るに用ひ、雄即ち「えつら」は雲雀や雀等の小鳥を捕るに用ひられたのであります。

三三三 木を叩く啄木鳥

太郎と次郎の兄弟が或秋の日に森の中へ散歩に行きますと、「こつんく」と叩くやうな音が聞えました。二人は思はず立ちとまりました。

次郎「あの音は何でせう。」

太郎はなほ其の音に耳をすまし乍ら考へてゐましたが、想ひ出したやうに太郎「あれは屹度啄木鳥が木を啄いてゐる音でせう、よくさがして見ませう。」



木を叩く啄木鳥

一一八

二人は静に音のする方へ進んで行きますと、果して一羽の啄木鳥が木の幹にとまつてゐました。次郎は之を見て不思議さうに、

次郎「お兄さん、あの鳥はそんな真直な幹にとまつてゐます。なぜ滑り落ちないのてせう。」

太郎「あれが啄木鳥の得意な藝で、他の鳥では中々真似の出来ないことです。然しあの鳥にはそれが出来るやうに特別な仕掛があります。まづ其の趾を注意して御覧なす。」

次郎「なる程違つてゐます。なみの鳥では四本の趾のうち、一本だけが後向きになつてゐますのに、あの鳥では四本のうち二本が前へ二本が後へ向いてゐます。」

太郎「そこです、その趾があつて而も爪も鋭いですから、容易に滑り落ちるやうなことはありません。なほ外に都合のよい所はありませんか。」

よく見て考へて御覧なす。」

次郎「分りました。尾羽を幹にあてゐます。あれで體を支へてゐるのでありますまいか。」

太郎「さうです。あの尾羽は中々堅いですから、あのやうに幹に突張つて居れば、十分體を支へることが出来るのであります。」

次郎「なぜあんなに嘴で木を叩いて見るのてせう。」

太郎「啄木鳥は木の中にある鐵砲蟲や木蠹蟲を餌とするのですから、それが居るかどうかをあの音によつて聞き分けるのでせう。そして若し居れば孔を穿つて舌を挿し込んで、其の蟲を引き出すのです。」

次郎「舌で蟲を引き出すとは中々面白いことですが、一たい其の舌はどんな風になつてゐるのですか。」

太郎「この鳥の舌は非常に長くて、其上、先に鉤がありますから、此の鉤

木を叩く啄木鳥

一一九





啄木鳥の舌

て蟲を引き出すのです。又其の長い舌をどういふやうにして出し入れするかといふことに就いては、歸つてから圖を見せてお話しませう。」

次郎「啄木鳥は蟲の外に何も食べませんか。」

太郎「木の實等も食べぬことはありません。殊に「あをげら」といふ種類等は、木の實の方を餘計に食べる位です。」

次郎「それではこの鳥は人の役にも立ち、又害にもなるのですか。」

太郎「さうです。けれどもどちらかといへば害蟲を食べてくれる功の方が餘計ですから、今では保護鳥となつてゐます。」

次郎は森の中で「こつんく」の音に注意して、それからそれへと疑を抱いた爲に、啄木鳥のことがよく分つて、非常に愉快を覺えました。

三四 巢を盗む杜鵑と郭公

ほととぎす啼きつる方をながむれば

たゞ有明の月ぞのこれる

此の歌は既に諸君が百人一首の歌がるた等で誦じてゐることと思ひますが昔から杜鵑程多く詩や歌にあらはれた鳥はありますまい。杜鵑は啄木鳥と同様趾が前後に二本つゞ出てゐる鳥で、鴨よりは少し小さく、脊が灰黒色、腹は白色で黒色の短い横條があり、なほ黒色の尾羽に白色の斑紋がありますから、ちよと小さい鷹のやうに見えるのであります。

郭公は形や色の具合が杜鵑そっくりですから、昔は同じもののやうに思つ



てゐましたが、實は別種のもので郭公の方が杜鵑よりも大きいのであります、そして共に他の鳥の餘り食はぬ毛蟲等を食ひ、又自分で卵を孵へさないで之

を他の鳥の巢に入れて、其の鳥に孵へさせて而もなほ育てさせるといふ横着な鳥であります。

郭

杜鵑は主に鶯の巢に卵を入れ

るやうですが、郭公では「もず」

「ほゝじろ」等の巢に入れるので

あります。「もず」や「ほゝじろ」

は自分の卵の中に外の鳥の卵が

はいつて来たとは夢にも気がつ

かないので、熱心に温めます。所が郭公の卵が一番先に孵つて雛が出て來



公

ます。此の雛は残酷にも外の卵を皆巢の外へ出してしまつて、自分獨り假の

親から餌をもらつて育つて行くのであります。それで郭公の卵一個が完全な

鳥になるのは、他の鳥の四五個はどうしても無駄になるわけになります。

而も郭公は三四日置に一個づゝ約二十個の卵を生みますから、是等の爲には

他の鳥の卵が百個ほど犠牲にされるのであります。杜鵑の育ち方も大體に於

てよく似て居ります。こんなひどいことをする鳥ですが其の啼聲が「本尊掛

けたか」と聞えるといふので、昔から此の聲を聞かうと苦心したものが多か

つたやうです。けれども其の姿はとも見られぬものと信じてゐたやうで、

初めにあげたやうな歌も其の心持ちがあらはれてゐるてせう。

三五 愛すべき燕

去年作つた軒下の古巢を忘れて、今年再び歸つて來る燕を見ると、何



となく義理堅い鳥のやうに思はれて、自然に可愛くなるでせう。其の燕が朝から晩まで東に飛び西にかけて少しも休むことなく集めて歸つた昆虫を、聲をはりあげて喜び迎へてゐる雛に與へてゐる所を見ると、其の親子の情の細やかなのに感心せずには居られません。今日では法律で此の鳥を捕へることを禁じてゐますが、さうでなくても此の鳥を殺さう等の心は起りません。昔の人も此の鳥を捕へるのは一つの罪のやうに考へて、よく可愛がつたのであります。

燕は飛ぶ事が上手で、高く上つて僅に其の影が見えるかと思へば、忽ち低く下つて我々の眼を掠めるやうな事があります。そして飛行が速であるだけてなく、其の方向を變へることも中々巧で、所謂燕返しといふ他の鳥の眞似られない早業をしますが、燕の體をよく調べて見ますと、飛行の上手なわけがよくわかるのであります。



第一に其の翼は體の小さい割合に非常に長くて、其の先が尖つてゐます。燕は此の長い翼を羽搏して速力を出すのですが、なほ翼を擴げたまゝて所謂空中滑走をしてゐることがあります。これは翼の長い鳥でなければとても出来ぬことであります。尾は二つに分れて左右に開いてゐますが、燕が速く飛び乍ら急に方向をかへることの出来るのは、此の尾羽を巧に使ふ事が出来るからであります。脚は細くて小さいですが、飛び乍ら餌を捕へる燕にとつては地面を歩く必要が少く、たゞ體を支へることが出来ればよいのです。けれども中々鋭い爪を持つてゐますから、壁等にも止まることが出来ます。其の時尾羽を體の支へとして使ふことは啄木鳥に似てゐます。眼は中々遠くまで見えて、一町先に飛んでゐる蟲でも見ることが出来るのであります。嘴は短いです、平くて眼の下まで裂けて、口を大きく開くことが出来ますから飛び乍ら蟲を捕へるには頗る便利なのであります。

燕は年中我が國に居るといふのではなく、秋が來ると南の方の暖い國に去り、春暖になると再び歸つて來ることは、既に諸君の知つてゐることです。斯様に氣候によつて居所をかへる鳥を一般に候鳥といふのであります。さて燕の去るのは、氣候が寒くなると其の餌として大切な昆蟲が見附からなくなるのによつてせう。行く先は支那の南部か又は印度の邊だらうとのことですが、一時間に百八十哩も飛行する力を持つてゐるのですから、海を渡り山を越えて遠くへ行くのには都合がよいのであります。再び元の巢に歸ることに就いては、或人の實見によると二三年もつゞき、或時の如きは七年目になほ元の巢へ歸つたのがあるさうです。

歸るとすぐ古巢を修繕しますが巢は泥を唾で練つて作り、乾いても割れないやうに草をまぜて、恰度左官が壁土に寸沙を入れるのと同じやうにしてゐます。なほ巢の中には羽を敷いて、そこへ四個から六個位の卵を産みます。

卵は十二日程たてば雛になりませんが、兩親は非常に之を可愛がつて餌を與へることは前に述べた通りであります。そして或人の計算によると、燕の兩親が一日に捕へて歸る昆蟲の數は約六千四百ださうです。して見ると燕が如何に農作物の爲に大切な鳥であるかよく分るてせう。昔此の鳥を捕へることを罪のやうに考へたのは、たゞ可愛い鳥であるといふ爲のみでなく、有益な鳥であることからせう。今日保護鳥としてとることが禁ぜられてゐるのも其の爲であります。

三六 食用になる燕の巢

上等の支那料理には必ず燕の巢の御馳走が出ます。かういへば諸君はあの泥で作つた巢が食べられるかと、不思議に思ふかも知れませんが、支那料理に出る燕の巢は我が國にゐる普通の燕と違つた燕が作つたものであります。

此の燕は南洋に多く居つて、海岸のけはしい岩の横へ唾液で練つた海藻でこしらへた巢をかけるのです。然し近頃私が南洋に行つた人から送られた燕の巢を調べて見ると、其の中に海藻らしい繊維はありません。即ち全く一種の唾液から出来た美しい白色の物質であります。そして之を水に浸して置くと、膨れて軟くなるのであります。

前にも述べたやうに支那人は之を好んで食べますが、何分危険な岩の上に巢をかけるのですから、之をとりに行くことは命がけの仕事でした。ところが今から三十年程前に或支那人がジャワ島のギリシーといふ所で、色々苦心の結果人が用意して置いた場所へ、毎年巢をかけることに成功しました。其の場所は丈夫な庫のやうな建物で、周りに燕の出入する窓があるだけです。から、中は大そう隠氣になつてゐます。そして天井は木で作つてあつて格天井のやうになつてゐて、燕は其格天井の隅々に巢を作るのであります。今日

では此の事業が発達して、ジャワやボルネオ島から支那へ輸出する巢だけで毎年何百萬圓といふ金額に達し、之がために大きな會社が出来てゐる位であります。

三七 鳥の手柄

米や麥を初めとし、其の外色々の農作物にとつては、昆虫の害程恐るべきものはありません。或人の計算では北米合衆國の田畑や山林が受けてゐる昆虫の害を金高に見積ると約四億弗で、合衆國全體の學校教育の費用よりも約一億弗も多いさうです。我が國でも米の收穫の約十分の一位は此の昆虫の害を受けてゐるだらうといふ事ですから、全國に五千萬石の米がとれて其の價を一石二十圓とすれば、米の取れ高即ち十億圓の一割即ち一億圓の害を受けてゐるとなるのであります。これだけあれば軍艦が數艘出来るわけですか

ら、其の害は實に恐るべきものといはなければなりません。ところが此の昆虫は非常に殖え易いもので、或人の計算によると一匹の蚜蟲は一年の終には一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇匹となる勘定だそうです。けれども實際にはそれ程殖えもしませんのは、敵に食ひ殺されるためであります。そして其の敵の中で最も多く昆虫を食ふものはいふまでもなく鳥類であります。して見ると鳥類が我々に與へてゐる利益は甚だ大といはなければなりません。

奥地利國では此の頃歐洲大戦争の爲に肉類が非常に高くなつたので、其の補ひとしてこれ迄捕ることを禁じて置いた鳥類の肉を食ふことを許したところ、害蟲が非常に殖えて林の木が其の葉を食はれてしまつて、冬枯のやうになつてしまつたさうであります。又今から七十年程前北米合衆國の或所に何處からか非常に澤山な蝗が飛んで来て、其の邊の麥畑を荒し盡さうとした



ら、程遠くない所の湖に居た何萬といふ鷗が時を移さず飛んで来て、四五日の中にこの蝗蟲を食ひ盡してしまひました。お陰で其の邊の農夫は飢饉をまぬかれることが出来たのであります。今其の地に行つて見ると此の恩のある鷗の爲に立派な記念塔が建てられてゐるさうです。なほ又少し古い話ではあるが、普魯西國のフレデリック大王は櫻桃の實が何よりも好きでした。所が雀が此の實を啄むものですから、大王は國內に命じて雀を捕らせました。すると毛蟲其の他の害蟲が大そう殖えて、櫻桃の木を害することが非常なものでした。さすがの大王も之には閉口して、今度は前と反對に雀を保護するやうにとの命令を出したといふことであります。

我が國でも今日保護鳥として捕へることを禁じてある鳥が澤山ありますが多くは今述べたやうな働きがあるからのことです。諸君も進んで是等の鳥を可愛がつてやらなければなりません。

三八 小鳥の音楽家と舞踏家

小鳥の中には其の色澤の美しい爲に可愛がられるものも少くありませんがよい聲で囀つたり、面白い藝をするために可愛がられてゐるものが澤山あります。

小鳥中の音楽家として第一にあげねばならぬものは、何といつても鶯でせう。昔から「梅に鶯」といつて、梅には鶯がつきものゝやうに思つてゐますが、實際をいふと鶯は冬になつて餌が見附からなくなると、山の方から人里近くに出て來るのであります。けれども其の時はまだ囀りませんから一向氣が付きません。所が恰度梅の花の咲く頃になると美しい聲で鳴き初めますから、其の頃初めて梅の花を訪ねて山から出て來たやうに思はれるのであります。さて其の鳴聲は御承知の通り先づ「ホーホケキョー」と聞えます。



が、なほ其の後に「谷渡り」といつて、「ケツキョー」と續けます。而も其の聲は如何にも朗かて節が面白く、聞いてゐると何ともいへぬよい氣持になるのであります。然し鶯がこのよい聲で鳴くのは三月から七月頃までが主であつて、あとはさう鳴きません。三月頃から七月頃までは恰度鶯が卵を産む時期であります。鳥の中には此の卵を産む時期だけ特に羽色が美しくなるものがありますが、鶯では此の時期だけ特によい聲が出るのであります。其の巢は多く谷川に臨んだ木の三つまたになつた所へ入口を横に向け作り多くは草の根等を細くたくんで、それを蜘蛛の糸で絡んで居ります。

春も大分進んで鶯の聲もはや深山の谷でなければ聞かれぬ頃になると、次にあらはれるのは雲雀であります。黄色な菜の花や緑色の麥の葉に暖い風が吹く頃野原に出て見ると、大空高く黒點のやうに見える姿から、調子のはやいそして聲の強い音楽が聞えるでせう。それはいふまでもなく雲雀の聲



てあります。鶯のやうに美しい朗かな聲とはいへませんが、如何にもさびくと陽氣な聲で、何となく人の心を浮き立たせます。それで若し春の野に雲雀の聲がなかつたらば、何か物足らぬ感じが起きるてせう。雲雀といふ字は此の鳥が空高く舞ひ上るといふ所から附けたのでせうが、西洋でも此の鳥を天使に譬へてゐます。

雲雀は中々伶俐な鳥で、空から下る時には決して巢のある所へ下りません。ですから下りた所を幾ら探しても、其の巢は見附かりません。然し舞ひ上る時には直ぐ巢から飛び出ますから、それを氣を付けてゐると見出すことが出来るのであります。多くは河原の茨の中か又は麥畑の麥の株の所に巢を作つてゐますが、此の鳥は害虫を食つてくれますから、物好きに其の巢を荒すやうなことがあつてはなりません。

温く暢りとした春には、鶯や雲雀のやうな音楽がよく調和しますが、清らか



な秋の日には矢張り眼白のやうに、チリチリと簡単に而も爽かな聲の方が却つて氣持がよいやうに思はれます。眼白は名の通り眼の周りに白い羽毛が環のやうにあるのが特徴で、澤山群つて居ることが好きであります。枝の上にとつた時などでも、お互に體を押し合つてゐることがありますが、俗に之を「眼白押し」といつてゐます。一番好きな食物は柿の實と見えて、目に輝いて一層赤く美しく見える柿の果實を慕つて來るのを見るとが少くありません。東京淺草の花屋敷を見た人は山雀の愛嬌ある藝が目にとつたてせう。又此の鳥を籠に飼つて見た人は、面白く引繰返るのを見ただてせう。山雀は性質が伶俐な上に羽づかひが大それた上手ですから、之に藝を教へると色々な業をするやうになります。まづ宙返りを初めとし、車井戸の釣瓶を上げ下げしたり輪をくぐつたりして人を笑せるのであります。

オームトラリヤには「小屋鳥」といつて、巢の外に別に場所を作つて、そ

こで踊るものがあります。其の場所は大抵平たい地面を綺麗に掃除して美しい木の葉を敷き、其の周りには蝸牛の殻等を置いて飾としてゐるさうで、其の所へ澤山集つて愉快に踊るのださうであります。

三九 鳩の一族

同じ種類に属する鳥であり乍ら、其の中には色々變つた形のもので出るのは、別に珍しい事ではありません。然し鳩の一族程變り者の多い種類は他にありません。或時鳩一族の總本家といふべき「かはらばと」が、多くの一族を集めて懇親會を開き、次のやうな話をいたしました。

「私は御覽の通り鳩としては左程大きな體ではありませんし、色といひ形といひこれ又別に勝れた所がありません。けれども失禮乍ら皆さんの先祖は何れも私の家から分れたのであつて、いはゞ私は一族中の總本家をつい

てゐるものであります。ところが同じ一族の方であり乍ら、未だお目にかゝつた事もなければ、お話した事もない方がありますので、今日お集りを願つたわけがあります。さてお目にかゝつて見ますと色々變つた姿の方が多くてちよと見ただけではとても同族と思へないやうな方もありますが、然しよく注意をいたしますと誰方を見ても頭が小さくて眼が柔和なこと、嘴の先は角質で堅いけれども根元の方は軟かいこと、胸が張つてゐること等、さすがに私と似た所があつて、誠におなつかしう感ずる次第であります。どうか内輪の者ばかりですから、うちとけて各方の身の上や思ひ等について、お話しして下さいに願ひます。」一族の鳥は此のあいさつに非常に満足して、各が代るくお話をしたことは即ち次の通りであります。

どばと「私は一族の中では未だ餘程本家の「かはらばと」さんによく似た方ではありませんが、多く人の家に飼はれますから又の名を「いへばと」とも申します。

なほお宮やお寺にもよく飼はれてゐますが、殊に人間は私達を軍神八幡様のお使であるやうに考へてゐますから、従つて八幡様の社に飼はれてゐる仲間が中々多うございます。」

傳書鳩「私の祖先は「どばと」さんの家から分れたのですから、總本家の「かはらばと」さんからいへば分家の又分家とでもいふべきものであります。私の特徴は御覽の通り嘴が長くて先が尖り、眼の周りに羽毛がなくて、身体が少し長形な點であります。なほどんな遠方の土地につれて行かれても、空中に放されると一直線にもとの出發點に歸るといふ特別な性質を持つてゐます。ですから昔アラビア人は私達の先祖を郵便物を持つて行かすのに使つたさうであります。それから又此の前の普佛戦争に於ても、此の度の歐洲戦争に於ても軍事の通信用に働いてゐるものがあるものであります。」

残りの鳩を見渡しますと何れも皆本家の「かはらばと」と比べて、形が非

常に變つたものばかりですが、其の中で眞先に名乗りをあげたものはタンブラーであります。

タンブラー「私は頭が圓くて嘴が短いですからちよと雀のやうに見えますが、胸が特によく張つてゐますので、飛ばうとすると中心を失つて背の方へ廻轉するのであります。今皆さんにお慰みの爲一つ御覽に入れませう。」といひ乍ら飛び上りますと、なる程面白く廻轉してまるで角兵衛獅子のやうでしたから、皆のものが拍手喝采いたしました。タンブラーは再び元の席に歸つて次のやうな話をつゞけました。

「私の祖先はこれ程ひどくは廻轉しなかつたさうですが、人間は私共の廻轉する度數の多いものを譽めて、特別に大切にしてくれまますから、従つて多く廻轉するもの程益々繁昌したのであります。私等は一時間に四十五回も廻轉しますので仲間の中では巾の利く方であります。なほタンブラーといふのは

英國人のつけてくれた名で、日本の言葉でいへば廻轉者といふ意味になるの
てあります。」

「フアンテール」私の特徴は尾にございます。皆さんの尾羽は大てい十二三本の
やうですが、私のは四十本位もあつて、まるで扇を廣げたやうであります。
フアンテールはそれが爲につけられた名で、日本の言葉で申せば扇尾といふ
のにあたるのであります。歩く時には斯様に頭を引込めて尾羽にくっつけます
から、人間は皆孔雀のやうだといつてゐます。私共の仲間では尾羽の数が多
い程餘計に人間に可愛がられて巾が利くのであります。

引き續いて翼と足が長くて、何時も直立の姿勢をしてゐるパウターが得意
の胸を突き出して、「私の餌囊は非常に大きくて、空気を呑み込ひとまるで球
のやうに脹らみます。」

といひ乍ら空気を吸ひ込んで見せました。するとなる程大きく脹れて玩具の
風船球のやうに圓くなり、嘴も殆ど見えぬ位でしたから、これまた拍手喝
采でした。

なほ二三のものゝ話があつてから、本家の「かはらばと」は今日の懇親會
が非常に愉快であつたことを述べてなほ

「私共の一族が斯様に繁昌したのは、第一に變り易い性質があること、第二
に變つた所を子孫に傳へる性質のあることによるのでせうが、人間が我々を
よく見分けて特徴のあるものを十分保護してくれなかつたならば、とても今
日のやうには進まなかつたてせう。」と話しました。

四〇 長尾鶏

鶏はもと馬來半島あたりにすむ野生のものを飼ひ馴らしたもので、今では
肉をとるためのもの、卵を産すためのもの、見て楽しむためのもの等、それ

目的によつて非常に澤山の品種が出来てゐます。これ等の品種は大抵皆西洋で作られたのですが、我が國特産といつてもよいものに「チャボ」と長尾鶏があります。何れも皆見て楽しむ爲に飼はれてゐるものであつて、其中「チャボ」は肉冠が大きくて脚が短い程珍重され、長尾鶏は尾の羽が長い程珍重されるのであります。

長尾鶏がどうして出来たかといふ事に就いては、詳しくは分りませんが、何でも徳川時代に朝鮮から渡來したものを、だんくんに發達させたことが事實のやうであります。殊に土佐の殿様は江戸に往復する時の行列に立てる槍の鞘には、何時も長尾鶏の尾羽を飾りとしたさうです。それですら槍飾さへ見れば、あれは土佐の殿様か否かがすぐ分つた位であります。又殿様の方でもなるべく長い尾羽をつけるやうに奨励したものですから、領内では争つて熱心に飼つた結果、一丈以上に達する尾羽をもつものが出来ました。



長尾鶏

長尾鶏

今日では主に土佐の長岡郡後免町附近の農家で之を飼つてゐますが、既に其の尾が一丈六七尺から二丈五尺に達するものがあります。尤も此の尾羽の本當の尾を被うところの簀毛にあたるもので、本當の尾は短くて其の下に隠れてゐるのであります。之を飼ひ育てるには雛を特別の箱の中に入れて置いて毎日僅に一二回の散歩を許し、其の尾が四五尺になると之が損じないやうに、輪を巻いて散歩させるのであります。ですから兎角運動が不足勝になりそれが爲に胃の病氣等起して倒れるものが少くないさうであります。

四一 お歳暮の雉子と鴨

太郎の父はお歳暮の贈物として他所からもらつた雉子と鴨とを太郎に示して、「一緒に之を解剖するつもりで、料理して見ませう。」といひました。何事にも研究心の強い太郎は大に喜んで、理科の時に使ふ解剖器等を持つて來ま

したが、解剖の前に先づ次のやうな問答が初まりました。

父「雉子と鴨とを比べると形はどうちがひますか。」

太郎「鴨の方は船形ですが、雉子の方はさうでもありません。」

父「なぜ鴨の體は船形なんてせう。」

太郎「鴨のやうに水を泳ぐ水鳥では、其の形の方が浮ぶのに都合がよいです。」

父「頭の方ではどんな所が違つてゐますか。」

太郎「雉子の頭には紅い肉冠がありますが、鴨にはそれがありません。又雉子の嘴は鋭く尖つてゐますが、鴨の方は平くて幅が廣いです。」

父「鴨の嘴の平いのは何かに都合がよいのでせうか。」

太郎「泥の中の蟲や小魚等を捕るに都合がよいと思ひます。」

父「其の通りです。然し小魚等を捕へるにはもつと都合よくなつてゐる所が

あります。よく調べて御覽なさい。」

太郎「なる程上下兩嘴に細かい刻みがあります。これでは銜へられた小魚等容易に逃げられます。」

父「鴨の嘴の先へはなほ神經が澤山來てゐますから、これにて餌をさぐるとまるで我々の指先で物をさぐるやうによく分るので。」

太郎「雉子は何を食へるのでせう。」

父「木の實や穀物を食へ、又時には昆蟲等を食へる所は恰度鶏に似てゐます。」

太郎「なる程嘴も鶏のによく似てゐます。」

父「雉子は嘴の外になほ鶏に似た所はないですか。」

太郎「脚が似てゐます。大きくて太い所や距のある所等すつかり鶏の脚と似てゐます。」



父「さうです。雉子は鶏と同じ仲間て、鶏のやうに歩くことが達者です

けれども翼は身體の割合に小さいですから、飛ぶ事は餘り得意ではありません。

鴨の脚は鶏の脚に比べてどう違ひますか。」

太郎「第一着き所が違つてゐます。鴨の脚の方が餘程後の方に着いてゐます。

これでは随分歩きにくいせう。」

父「左様中々歩きにくいと見えて、其の歩き振りをみるとお尻を振つて誠に滑稽です。その代り泳ぐのには此の方が都合がよいのです。殊に頭を水中に入れるのには、脚が後方にある方が重心が前に移り易いから、大それた都合がよいのであります。」

その外に水を泳ぐに都合のよい點がありませんか。」

太郎「趾の間に蹼があります。」

父「さうです。此の蹼で水をかきますから、體が前へ進むのです。昔の人の

歌に、

たゞ見れば何の苦もなき水鳥の
足にひまなきわが思ひかな

といふのがありますが、鴨も誠に樂々と進んでゐるやうですけれども、實際は此の脚をいそがしく働かせてゐるのであります。」

太郎「鴨は此の寒いのに水の中で平氣ですのはなぜでせう。」

父「先づ雉子と鴨との羽を比べて御覽なれう。」

太郎「いかにも鴨の羽の方がむくむくとして多うです。けれども水へは入れば此の羽位は水が透るでせう。」

父「所がさうでないです。鴨は常に尻の所から脂を出して、之を嘴につけて羽に塗つてゐますから、餘程水を弾くことが出来るのです。あの鴨が水から上つた時を御覽なさい。一度身振すれば水はすぐ飛んでしまひます。」

太郎「それでは羽に脂をぬるのは鴨だけですか。」

父「大抵の鳥は皆羽に脂をぬりますが、鴨のやうな水鳥程甚しくはありません。」

さア、もうそろそろ羽をむしり取りませう。」

太郎「おや、羽の生えてない部分があります。」

父「別に驚くことはありません。鳥の羽は皆外から見ると一面に生えてゐるやうですが、實際は生えてゐない所もあるのです。」

太郎「もうすつかりとりました。今から腹を開いてよろしいですか。」

父「ちよつとお待ちなさい。たき火をして細い羽の残りをやきませう。そして太郎は鴨を解剖しなさい。私が雉子をします。」

太郎「皮を剥がうとすると白いぬらぬらしたものがかくつついて來ます。」

父「それも脂です。水鳥は體が冷えぬやうに脂を澤山もつてゐますが、殊に

冬は多いのです。」

斯様に面白くて有益な問答をしながら太郎は父の指導によつて鴨の解剖をしましたが、胸の筋肉の大きいには今更のやうに驚き、其の外氣囊や肺や心臓や胃腸等を十分に調べて、鴨に就いては餘程な知識を得たのでした。

四二 雁の旅

昔から燕去雁來といつて、春來た燕が南の暖い國に去らうとする秋の頃となれば、今度は雁が北の方の寒い國から渡つて來ます。雁は雁ともいつて鳴に似た水鳥ですが、有名な紀貫之が

春がすみ霞みて去にしかりがねは

今ぞ啼くなる秋霧の上に

と讀んでゐる所を見ると、ずつと昔の人も既に此の鳥の春去つて秋來る事

に、氣がついてゐたのであります。諸君もさだめし多くの雁が美しく列を作つて、或は竿形に或は鍵形になつて飛んで行くのを見た事があるでせう。此の雁の列も昔から有名なものと見えて、名高い孫吳の兵法にも、飛んで行く雁が列を亂すのは伏兵のある知らせだと書いてあります。又我が八幡太郎義家は此の事を知つてゐた爲に、危い所をまぬかれたといふ話は既に諸君の知つてゐる事でせう。

秋に來て春に去る鳥は雁の外に鴨を初めとして其の外澤山ありますが、昔から雁だけが特に人の注意を引いたのは、其の行列の美しい事によるのでせう。そして風のない物しづかな月夜に、清く鋭い聲をあげて飛ぶことも亦其の一原因でせう。西洋では昔から雁は月の世界から來て月の世界に去るといふ迷信があり、我が國にも、「雁や月の邊より現はるゝ」といふ句があります。然し夜渡るのは雁だけではありません。思ふに晝間は適當な所で食を求



めて、夜飛ぶ方が都合がよいのでせう。又特に月夜を選ぶのは建物や燈臺等に衝突するやうな危険を避ける爲てせう。

我が國に来る雁は鴨等と共に西比利亞に去つて、彼の地で卵を産むのであります。

四三 鶺鴒 飼

長良川の鶺鴒といへば昔から有名なものですが、皆さんは其の鶺鴒といふ鳥を知つてゐますか。此の鳥は鴨や雁と同様蹠を持つてゐる水鳥です。體は稍々細長く、羽の色は眞黒で、嘴の先は鉤形に曲つてゐます。脚が非常に後の方にあるために、立つた時の姿勢は餘程眞直ですが、歩くのは極めて下手てやつと尾で體の釣合を保つてゐます。然し飛ぶことと泳ぐことは中々上手で、夏は多く海の方へ行き、冬は多く川に来て、潜つて小魚等を捕つて餌と



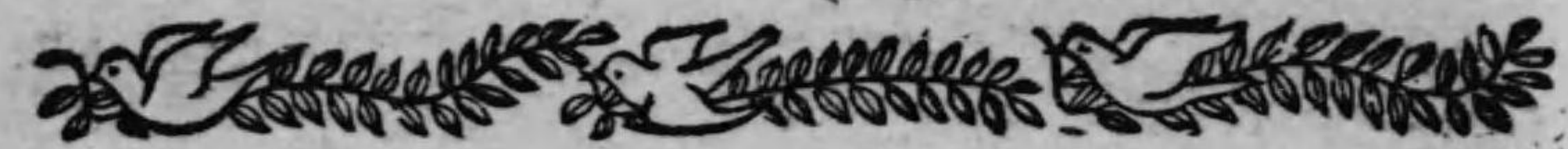
します。鶺鴒は其の魚を追ふ性質を利用したものであります。

鶺鴒はよく錦繪等にある通り、舟に篝火を焚いて其の火に集る鮎を、脚に網をつけた鶺鴒に捕へさせるのであります。暗の夜に篝火を焚いた舟が幾艘も川に浮ぶと、其の影が水に映つて中々美しいですから、美濃の長良川では夏になると澤山の客が遊覧に来るのであります。鶺鴒は一日に一回しか餌を與へられませんから、川に放たれると喜び勇んで鮎を追うて之を捕へますが、前以て頸に輪がはめてありますから、嚙込むわけに行きません。其のうち網で引きあげられて吐出されるのであります。ひもじい所を折角捕へた鮎であるのに之を人間が横取りすることは可愛さうですが、然し是等の鶺鴒は平素樂に飼はれてゐるのでありますから其の位の仕事はせなければなりません。一艘の舟に十二羽位な鶺鴒を使ひますが、之れだけの鶺鴒が右に左に入り亂れて鮎を追ふのですから、脚につけてある網がどうかするともつれようとする、それをう

ペリカン
 一六四
 まく捌いて行くのも中々の見物であります。鮎が多くて鵜が元氣ならば一羽
 て以つて一時間に百尾の鮎を捕へるものさへあるさうです。

四四 ペリカン

動物園に居る多くの水鳥の中で、最も見物人の珍しがつてゐるものはペリ
 カンでせう。此の鳥は熱帯地方に産し、鴨雁等の普通の水鳥と違ふ所は趾全
 體が一つの蹼につながつてゐることでありませう。鴨や雁では前に出でゐる
 四本の趾だけが一つ大きな蹼につながれ後に出た一本の趾は別になつてゐ
 ます。それよりもペリカンで最も人の目を引くものは嘴でせう。先づ其の
 大きいのに驚かされ、次に其の下嘴が軟い膜で袋のやうになつてゐるのに
 驚かされるでせう。ペリカンは之を袋網のやうに巧につかつて魚を掬ひ取り
 上嘴でそれを蓋するのであります。そして此の袋に魚を溜めて置くことが



出来ませう。殊に雌鳥
 は此の袋に小魚を入
 れて置いて、口を開
 いて其の子に之をと
 らするのであります
 此の鳥はよく群を作
 つてゐるのですが、
 時には河等で圓陣又
 は馬蹄陣を作り、だ
 んくと魚を追ひつ
 めて行つて之を捕へ
 る等、中々伶俐なこ

信天翁とベンダイン



ペリカンの脚

とをすることがある
 さうです。

四五 信天翁

とベン
 ガイン
 小笠原島の東に南
 鳥島といふ島があり
 ます。此の島は名の
 通り初め鳥ばかりの
 島で、其の數何萬
 とも知れず、初め行
 つた人は足を踏み込